

辞典史

資料による中日大辞典編纂所の歴史 3

今泉潤太郎

辞典編纂処設置と辞典編集の開始

豊橋校舎正門（渥美線南栄駅寄りの門、愛知大学前駅のは副門）を入れてすぐ左手、線路沿いに木立に囲まれた平屋の建物がある。昭和30(1955)年4月、「華日辞典編纂處」の表札が建物の入口に掛けられた。台風で倒れた松の大木から挽いた板材に大書された文字は「康友」の雅号を持つ鈴木の手になる。合同教授会などに使用されてきた平屋が辞典編纂處となり、机、椅子、書架などが運び込まれ、部屋の真ん中にダルマストーブも置かれた。昭和8(1933)年上海の東亜同文書院で作成され敗戦で中華民国政府に接収された後、社会主義革命を経て中華人民共和国となった中国政府から返還された辞典カードが机の上に積み上げられた。数奇な運命を辿った14万枚のカードは用紙もインクの文字も変色し、この22年間にわたる日中の歴史を物語っている。部屋の壁際に特注の大型カードボックスが4架並べられた。

なにぶんこの間に中国語を取り巻く環境が激変した。昭和24(1949)年10月、世界の歴史に新しい一ページを開いた中華人民共和国が成立した。社会主義を標榜する中国の出現は世界の人々の耳目を驚かせアジア、アフリカ等いわゆる第三世界のリーダーとしての存在を予見させるものがあった。中国社会の変革に伴って中国語の分野における変化にも目を見張るものがあった。社会主義建設のスローガンのもとに、1950年代には普通話の普及と方言の整理、拼音字母と審音、異体字の廃止と簡化漢字の制定などが矢継ぎ早

に実施され、中華民国時代に始まった国語統一運動が一举に完成期を迎えた様相を呈した。すべての新聞、雑誌や一般の出版物は随時それらを採り入れて印刷され、さらには《学文化字典》《同音字典》《新華字典》など小型の国語辞書や多数の科学技術専門書等が大量に出版された。簡化漢字で印刷した社会主義中国を反映する新単語を目にして日本人は慣れ親しんでいる従来の漢字、漢語との違いに戸惑いを覚えた。まして中国語の学習者や研究者にとっては衝撃的で従来の中日辞典では到底これに対応できないことを容易に実感させた。返還されたこれらのカードもすべて見直し作り直すことになるが、無論それは編集作業の一部に過ぎないことは明白であった。

ここであらためて当時の辞典編集体制について述べてみる。返還カードの受入れが決まった昭和30年2月の大学評議会に提案された華日辞典刊行会暫定規定（原案）によるとカード作成者即ち鈴木擇郎、野崎駿平、熊野正平、坂本一郎（以上は同文書院華語教授）と伊藤武雄（日中友好協会理事長）並びに本間喜一（同文書院大学学長、愛知大学学長）、小岩井浄（同文書院教授、愛知大学法経学部長）、山崎知二（愛知大学文学部長）ら8名が評議員となり刊行会を組織し、この中に鈴木、野崎、熊野、坂本（以上は評議員）並びに内山正夫、桑島信一を編集委員とする編集委員会を置くとしている。これは前年の昭和29(1954)年10月返還されたカードの措置について本間、鈴木、野崎、熊野、坂本、伊藤ら関係者が相談した結果を踏まえて作られたもので、このうち評議員兼編集委員の野崎は仙台、熊野は東京、坂本は神戸に居住しており、実際の編集は愛知大学で鈴木、内山、桑島らによっておこなわれることは了解事項であった。昭和30年5月愛知大学で中国語辞典の編集、出版を目的とする華日辞典刊行会が正式に成立した。同会には評議員会と編纂委員会が設けられ、評議員は上述の原案通りとなり編纂委員は専門委員としての鈴木（編纂委員長）、熊野、野崎、坂本（以上の4名は評議員兼務）、桑島（書院29期）、内山（書院34期）、尾坂徳司（書院教員、法政大学教授）、池上貞一（書院40期）、張祿澤（7月着任予定）並びに協力委員として小幡清金、胡麻本篤一、松浦治七、松葉秀文、三好四郎（書院教員）、杉本出雲（書院40期）、黒木三郎、川崎一郎（書院44期）となって

おり、協力委員は全て学内の教授である。編纂委員の顔ぶれは4月から始まった辞典編集作業の実態を反映させたものではあるが、あくまで諸般の事情による形式的、網羅的ものに過ぎず、実際この規定による編纂委員会はその後一度も開催されたことがない。刊行会評議員会では同会の成立に至る経過とそれまでの編集作業の進捗の報告や執筆基準（案）の説明などがおこなわれた。では実際の編纂委員会といえばこれに先立って4月から鈴木、内山、桑島の辞典室メンバーと学内の中国関係教授——小岩井、池上、三好、杉本、川崎の編集協力委員とにより組織されて主に刊行会に提案する執筆基準（案）について討議してきたのである。7月に編纂専門委員の張祿澤氏が予定通り着任した。もともと中国人専門家としてかつて同文書院大学講師として華日辞典編纂に加わり戦後台湾へ渡った歐陽可亮氏の招聘を予定していた。同氏は昭和29年11月神戸市外国語大学で開催の全国学生中国語弁論大会の審査委員として来日していたが愛知大学赴任は実現せず、昭和30年に来日した夫人の中国大学国文科卒の張祿澤氏が家族とともに来豊着任し、インフォーマントとして長期にわたり編纂に参加することになり、張、歐陽両氏によって多くの疑問が解決され語彙の採否が決定された（「編者のことば」による）。なお歐陽可亮氏は昭和13(1938)年武漢で郭沫若（鼎堂）に師事し「泉堂」の名を授けられ甲骨学者、甲骨文書家として著名であり、以来両者の関係は密接でカード返還から辞典編集、出版以後にわたる郭氏の『中日大辞典』にたいする関心と好意の形成にも寄与している。歐陽、張夫妻に関する以上の記述は関富美子氏（同夫妻の長女、兵庫県宝塚市在住）から辞典編纂所に寄せられた資料と指摘によるものであることを記し謝意を表す。また前号で発表した「資料による中日編纂所の歴史2」中の、(i)本文の最後から3行目「台湾在住」以下次の行の「参加した」までと、(ii)資料2-2eの注の2行目中段以下終わりまでを前述の関氏の資料と指摘により削除する。

当初は辞典室の整備と並行して急がれていたのが執筆基準の作成であった。しばしば行う編集会議の議論を通して目指す辞典の姿が明らかになっていき、それを内山が取り纏めて執筆基準と凡例の原案として纏めていった。

執筆基準とは辞書を作る側が辞典の原稿となるカードを書く際に依拠すべ

き基準である。辞書の本文一親字、見出語とその発音・釈義・解説・例文とその訳語などの書き表し方、その中で用いる符号・記号などの形式や使用方法等にまで及ぶ詳細な規定である。辞典の執筆とは原稿としてのカードを作ることにほかならず、カードは必ずこのマニュアル通りに書かなければならぬ。さもないとおよそ辞書の名に値しない代物となってしまう。また凡例とは辞書を使う側が的確にその辞書を引くために最低限必要な事項を易しく要領よく簡潔に示したものであり、執筆基準と表裏一体をなしている。この辞典の執筆基準は中国語について、(i)使用漢字は中国のすべての簡体字を用いる、(ii)発音表記法は「漢語拼音方案」をもちいる、(iii)語彙一親字と見出し語の配列はアルファベット順、声調順とするの三つを柱として、親字、見出し語、発音、例文などの執筆の仕方を具体例を挙げて詳しく説明し、また釈義、解説、例文の訳語などの日本語については文部省「国語の書き表わし方」、「公用文の書き方」などに準拠するほか、中国の人名、地名など必要に応じて使用する旧字体の使用などについても細かく解説し、そのほか記号類の形と用い方についても定めている。後に資料として掲げたのは昭和36(1961)年10月第11次改正のものでほぼ決定稿である。勿論初めからこのように整っていたのではない。編集の進捗に応じて修正、追加された結果の産物である。

当時は電子複写機器がないので執筆基準など資料作りは実に面倒であった。まず手書きの原稿一基準(案)をガリ版印刷してから冊子に綴じて各人へ配布し、編集会議で審議の結果でた追加、修正をまたガリ版印刷し直し、各々の冊子に切り貼りしていった。追加や修正がふえて継ぎ貼りでは収まらなくなると、あらためて全部を最初からガリ版印刷し改訂版として新冊子をつくった。資料に掲げた執筆基準はその内容を組み直した印刷物であり編集で使っていた実物はまるでこれと別物の感がある。執筆基準の解説は省くが、その前言で述べている「この辞典の使用漢字は中国のすべての簡体字を用いる」について触れておく。コンピューター印刷前、活版印刷期の1960年代、当時我が国の大手印刷会社は簡体字の活字母型を持たなかった実情に照らせば、この言葉は現実を軽視したきらいがある。だが同文書院時代から

本格的な中国語辞典を作るとの信念を持って辞典編集をしてきた鈴木にすれば「すべての」と言ったのは至極自然なことであつたに違いない。しかし後に印刷出版が具体的になった段階で大手印刷会社三社から取り寄せた見積書中の活字母型製作費が三社ともあまりに巨額なのを知り驚いたと後年になって鈴木は述べていることからすると、やはり大胆な言い方であつた。

辞典室が整備され執筆基準も作成されて本格的に編集へと動くのは新たに宗内鴻（書院15期）、遠藤秀造（書院19期）、歐陽可亮及び志村良治（東北大学編纂文学部特別研修生終了）、編纂事務の杉本晃（愛知大学法経学部卒）が加わり、それまでの鈴木、内山、桑島、張と文学部助手に転じた今泉など計10名の編集体制となった昭和33（1958）年4月以降である。

資料

3-1 辞典編纂處開設と辞典編集の開始

- a 華日辞典編纂委員会規約、編纂費予算案（手書きメモ）
- b 愛知大学評議会議事録
- c 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10)
- d 執筆基準

今泉潤太郎 Imaizumi Juntaro 愛知大学名誉教授 専門：中国語学

3-1 a

華日辞典編纂委員会規約

- 一、本委員会は曾て上海東亜同文書院大学において、本華日辞典資料蒐集に従事した旧同人、愛知大学学長及び愛知大学学長の委嘱する愛知大学教授、助教授、講師、辞典編纂事務主任を以つて組織する。必要ある場合は委員会に諮り、他の方面の人材を参加せしめることができる。
- 二、委員会は華日辞典の資料蒐集、整理、編纂、出版に関することを協議し、この事業の進行を督促し、完成を期する。
- 三、常任委員会をおき、愛知大学内において勤務する委員を以つて之を組織する。
- 四、常任委員会は、辞典の編纂出版に関する一切のことを処理し、重要事項に関しては、之を委員会へ報告するものとする。
- 五、各委員は、事情の許す限り資料の蒐集その他において、本事業に直接的に援助を与える。

華日辞典編纂費予算案

一、カード箱							
二、カード	@ 1.	20	10,	000	枚		
三、人件費	専従者手当て@	40,	000	× 12	× 3年	1,	440,
四、同	応援者手当て@	3,	000	× 12	× 5人 × 3年	5	40,
五、資料費						5	0,
六、雑費						3	0,
						0	00
						2,	152,
						0	00

〔注〕一九五五年初頃作成の鈴木教授手書きメモ。

3-1 b

評議会議事録 昭和三十年二月十九日(土)

学長 小岩井 山崎 大林 久曾神
 全員出席 板倉 三好 大内 小幡 杉本 浅野

一、 華日辞典の件

新中国より旧東亜同文書院大学に於て編輯中の華日辞典のカードを送付して来たが文部省より補助金三百万円位をうけて編纂する件について、

- ・内山正夫氏招聘の件
- ・熊野正平氏の計画によれば一六〇〇万円の資金を集めて財団法人をつくり編纂する。

・此のカードは接収財産の返還されたものでなく郭沫若氏宛返却の文書を出したところ日中友好協会内山完造氏宛「日本人民に贈る」として届けられたものである(中国人民対外文化協会より)

・熊野正平氏案では一橋大学に事務所を置く計画であるが唯金をかけて印刷するだけでは趣旨に添はない。

・本年二月四日、日中友好協会理事長伊藤武雄氏文化部長を同伴来豊し協議の結果「日中友好の趣旨を尊重し、中国側の識者も若干入れ日本各方面の協力を求めて刊行の暁には何千部か中国にも寄贈する様に運びたい。」

右の趣旨を熊野氏に連絡したところ此のカードは

・東亜同文書院に残された唯一の文化財であり、書院の卒業生で刊行したいと言ふ様な話も出たが本年三月より本学に暫定的に編纂に取りかかることにした。

従つて人件費、会議費、資料費等もかかる。

最小限度の暫定的規約を作つたのが別紙である。

- (1) 内山正夫氏を国研の助教授又は教授として招聘し、辞書の編纂に専従してもらう。

- (2) 四月に編輯会議を開く。

- (3) 国研三十年度予算に計上すること。

- (4) 内山正夫氏の住宅は一応向山旧小西氏跡にする。辞典は国研で刊行する。文部省より研究費の補助をうけるが大学としても予算に計上の必要があるので一応評議会メンバーの了解を求める。

二、 選出評議員の改選について

〔注〕この部分が追記されている。

中国との文化交流に金字塔 世界一の大華日辞典を編集

新しい言葉も加えて

慶大三年計画で取りかかる

愛知大学では中国から返還された華日辞典の編集に近くとりかかることになった。旧東亜同文書院大学時代に編集にあたった同学、鈴木沢郎教授が主任となり同文書院出身の内山正夫講師がカードを一まず整理し旧会議室を編集室に当て、カードは鋼鉄のタナに発音順に分類しておさめ編集方針をねっているがカードの厚さは三十頁以上に達し、十二万五千語をおさめている膨大なものだけに編集には三カ年かかる予定で、文部省に今年度補助金として百三十九万円を申請している。

同学では十五日ごろ政治、経済、文学、新聞雑誌などそれぞれ専門の教授を集めて編集委員会をつくり、さらに全国の大学に散在している同辞典関係教授を招いて大委員会をつくることになっている。

編集にあたっては新しい言葉の追加も必要なので、この方面の収集のため中国人を派遣することも考えられている。これら新中国語を加えるとこれまでの辞典の三倍以上という世界一の大辞典となり、将来の日中文化学術交流の金字塔を打ちたてるものとして期待されている。なお出版については業者から引受けの申込みが多数あるが、いまのところいずれの印刷会社に請負わせるかきまっていない。

内山講師談 この辞典の特徴は例文が親切にしていることで、これに新中国の言葉が加わるとこれまでにない完全な辞書が完成するので慎重に関係者の知識を集めて編集する方針です。

中国の婦人を招く 学長の希望で教授陣強化

また同学では中国研究教授陣に中国婦人を招くことに決り、同学内に宿舍など受入れ準備を進めている。これは元上海東亜同文書院大学教授、欧陽可亮氏夫人で張祿澤さん(三三)といい、欧陽氏は旧知の本間学長の招きで戦後同学を訪れており、生きた中国語教授をやりたいとの学長の希望により夫人がこの中旬ごろ来学することになったもの。華日辞典編集の仕事がはじまった折なので、よい協力者が参加すると同学では喜んでいる。

〔注〕毎日新聞 昭和三十年五月十一日所載。

3-1 c (2)

来月に編集専門委

軌道にのる愛大の『華日辞典』 不足分は寄付金でまかなう

愛知大学国際問題研究所内にある華日辞典刊行会は中国保衛和平委員会から寄贈された華日辞典カード十二万五千枚を整理、加筆して最高水準の華日辞典の編集に本腰を入れている。すでに六回の小委員会を開き、アルファベット順に編集し注音符号（民国七年国民政府教育部が公布した標準発音符号）にローマ字式発音符号を併用することなど細かい点が決った、

従来の中国語関係辞典には自然科学に関する語句は比較的少かったが、最近の中共治下の工業力の発展、日中貿易促進など内外の情勢から今度編集する辞典には工業、貿易、機械技術などの専門用語を大幅に取り入れてこの辞典の一つの特色にしたいと編集に専従する内山正夫講師は語っている。

文部省に科学研究費として三カ年分三百五十万円の申請がしてあるが、削られた額は寄付金でまかなう予定。

七月九日、十両日元東亜同文書院大学華語教授陣鈴木沢郎（愛大教授）熊野正平（一橋大学教授）野崎駿平（東北大学教授）坂本一郎（神戸外大教授）の各氏も愛大に集まり編集専門委員会を開くことになっている。

“中国研究” 知りたい 東京から米人が来豊

愛知大学小岩井教授のところへこのほど東京在住の一米人学徒から愛知大学の近代中国の研究状況をみせてもらいたいと便りがあった。便りの主はポール・キヤラハン氏でハーバード大学出身で五・四運動を中心とした中国政治思想史の研究家で来る廿八日來豊する予定。

〔注〕 中日新聞 昭和三十年六月二四日所載。

初心者も簡単に使える 華日辞典・編集進む

愛大で中国人の紅一点も参加

愛知大学ではさきに中国保衛世界和平委員会から同大学に寄贈された華日辞典カードをまとめて新しい華日辞典を三カ年計画で完成しようと、学内国際問題研究所内に華日辞典刊行会を置き、熊本から招いた元東亜同文書院教授内山正夫講師を中心にカード約十二万五千枚の整理を進めていた。

その準備もほぼ終わったので、いよいよ来月九日、本間学長、小岩井法経学部長らのほかに、元東亜同文書院教授だった一橋大学熊野正平教授、東北大学野崎駿平講師、神戸外語大学坂本一郎教授や日中友好協会伊藤武雄理事長らを迎えて合同編集委員会を開く。

今までに開かれた学内刊行委員会の方針によると、辞典の性格として初心者でも簡単に使うことの出来るよう、辞典の編次(単語の順列)も従来あった中国式のポポモホ式を改め一般的なアルハベット式にかえ、音標文字を採用することになっている。

また従来辞典では自然科学系統や工業技術関係の単語、熟語の集録が少かったが、近年中共治下に入り、工業力の発展、貿易の振興などから、工業部門における機械名や部分品名の出でくる書物が多くなったので、こうした専門用語の集録にも力を注ぐほか、一九五二年に中国文字改革委員会が決定した簡化文字(従来文字を簡略にしたもので、我が国の当用漢字に当る)の採用など苦心が払われている。これらの点から新辞典は従来に類のない画期的な華日辞典となるわけで、学界はもとより各方面から大きな期待が寄せられている。

ただ一番の悩みは辞典編集に要する費用で、本年初め文部省に科学研究費として三カ年分約三百七十万円を申請していたが、望み薄となったので、内山講師も「寄付金集めなどの手も考えてはいますが、来年度は文部省に申請してみます」と語っている。

なお九日からの合同編集委員会には去る二十四日愛知大学中国語講師として台北から招かれた元東亜同文書院中国語教授歐陽氏夫人の張祿沢さんも紅一点として加わり、協力することになっている。

〔注〕朝日新聞 昭和三十年六月二十九日所載。

3-1 c (4)

新語二千の抽出も終る

愛大の華日語辞典の編集進む

去る五月末、本格的な編集事業にとりかかった愛知大学の華日辞典の編集委員会はその後、鈴木沢郎教授を中心に仕事は順調に進んでいる。

今までに、井上中国語辞典に基づき紛失していたカード三十三音節四千五百語の補充と

更に旧辞典に見られない新語約二千語の抽出を終えたのをはじめ、目下鈴木、桑島、内山の三教授の手によつて整理されたカードの中国の国語辞典との照会が行われている。

またこのほかに同大学の各教授の手でそれぞれの専門分野の新語の抽出が行われ、すでに杉本出雲講師から経済政策分野の新語約百語の集録が出来上がっている。なおこのほか新学期からは同大学の中国語講師の張祿沢夫人も参加、協力することになっており、編集事業は日を追って活発化して来た。

〔注〕朝日新聞 昭和三十年八月三一日所載。

華日辞典・編輯進む 完成三年後か？

中国の好意により華日辞典のカードが送られて来て以来、その成果が期待されている。本学内には華日辞典編輯所が設置され、鈴木沢郎教授を中心に辞典編纂の大事業は開始された。より立派な辞典をわが国、中国語学界におくるべく、絶ゆまぬ努力が続けられているが、その経過及び進行状態を訪ねてみることにしよう。

辞典編輯の仕事は、本年七月九日十日の両日、日中友好協会理事長伊藤武雄、元東亜同文書院大学教授熊野正平（現一ツ橋大教授）坂本一郎（現神戸外大教授）の各氏が本学に集って第一回の編輯会議が開かれた事により、実質的には始められた。これまでの数ヶ月間はこの会議に至るお膳立とも云うべき準備期間であったわけである。この会議によって編輯の方針が打ち出され規約が作成された。その後はこの規約に基づいて進められたが、その間辞書の複雑性に由来する諸問題が後を絶たず、夏期の二ヶ月というものはカードを作って行くと共に、問題点の集積に費された。そしてこの期間中に解決されるべき問題点は殆んど出された。このデータに基づいて九月末、編集専門委員が集まり、凡例などの執筆基準の改正が協議された。現在はこの改正原案にのっとりて進行しているし、この俾やうてゆける見通しがつき、あとは時間の問題だとのことである。しかし此事業遂行にあたってはいわゆるデータをカバーする事が出来る基準は完成された感じがあるが、経済的な面で困難をきたしている。この辞書編纂の趣旨が、日中両者間の文化交流を盛んにし友好関係を深める工具としては、お互の言語、文章の習熟が絶対的に要請されるものであること、現在中国学界に立つ辞典がなく、この辞典が完成された暁には東西に誇るべきものになることは確実であること、それに辞書のカードは中国の好意により日本国民に贈られたものであり、中国側でも注目し期待しているという点からも、各方面の絶大な援助が切望されている。なおこの完成は三年後とみられる。

〔注〕愛知大学新聞 第六九号（昭和三十年十月十五日）所載。

3-1 c (6)

華日辞典の資料に中華料理研究を提供

愛媛県の渡部さん

華日辞典編集の仕事が続いている豊橋市愛知大学鈴木辰郎教授のもとへ、このほど愛媛県温泉郡北吉井村、山之内中学校の渡部美登里さんから「新聞で華日辞典刊行のことを知ったが、私はこれまで中華料理について研究を続けてきた。お役に立てば幸いです」という手紙と一緒に中華料理を説明したカード九百枚を送って来た。

同大学では終戦当時国府軍に接収され、昨年九月中国保衛世界和平委員会の好意で中日友好協会あてに送られてきた旧東亜同文書院大学で集めた華日辞典原稿カード約十三万枚を基に去る四月華日辞典刊行会を作り、小岩井、鈴木、内山各編集委員らが中心となって華日辞典刊行の準備を進めているもの。

渡部さんから送られた中華料理の資料はザラ紙をカードの大きさに切って中華料理を種類別に煮方、作り方、原料、字の意味などをぎっしりと詳しく書込んだもの九百枚。

鈴木教授も「渡部さんは全然未知の人だが、中華料理に関する説明は大いに参考になる。好意は非常に有難い」と喜んでおり、十五日渡部さんあてに「これが将来辞典に取入れられたら利用者に大いに喜ばれるでしょう」というお礼の手紙を送った。

〔注〕朝日新聞 昭和三十年十二月十九日所載。

3-1 c (7)

華日辞典に中共から新資料

愛大へ「中国語文」など五冊

華日辞典の編集を急ぐ愛知大学の華日辞典編集所に、このほど中国人民対外文化協会資料交換所から一通の手紙に添えて辞典編集資料五冊が贈られ、鈴木沢郎教授、内山専任講師をはじめ所員を喜ばしている。

昨年の七月、来日した中国貿易使節団が名古屋に立寄ったさい、小岩井学長や鈴木沢郎教授らが団員の「人民中国」日文版編集部の康大川氏を通じ資料の収集を依頼していたもの。こんど贈られた本は「中国語文」「北京国語語法」「同音字典」「常用漢字三千五百字表」「簡明字彙」などである。

〔注〕朝日新聞 昭和三十二年三月十四日所載。

3-1 c (8)

『華日辞典』編集に若い力

春休み返上し協力 愛大生 人手不足みておれぬと

日中両国の平和促進を図る橋渡しとして華日辞典を一日も早く完成しようと、

愛大文学部中国語学科の学生十名は春休みに入ったさる四日から

同大内、華日辞典編さん所で勉学をかねて辞典編集事業に

協力している――。

愛知大学が新時代のわかりやすい華日辞典編集という大事業にのりだしたのは一昨年五月以来二年の歳月が流れ、●●●●●有志をはじめ中共、●●●●●あふれる援助の手が差し伸べられたほか、昨年八月には文部省の科学研究費百三十万円の交付にも成功した。しかし専任者は編集委員長の鈴木沢郎教授、内山正夫、張祿沢両講師、杉本晃助手の四人だけのため、なかなか計画通り進まず、このほどようやく基礎資料の整理が一応まとまったところ。

学校側でも編集事業を軌道にのせるためには最低二十名の従事者が必要だと準備しているが、予算難で早急な実現はむづかしく各方面へ協力方を依頼するより方法がないとみられている。この事情を知った学生たちが自発的に編集協力を申出たもので、静かな同編さん所もこのところ若さと活気にあふれている。

鈴木編集委員長の話 従来の辞典は七万語前後だが、これはさらに充実して十万語以上に
するつもりだ。予定より大分遅れたが、近くマイクロ撮影機も入り資料収集に大きく役立つ
と思うので三十五年までにはなんとか完成したい。

〔注〕中部日本新聞 昭和三二年三月●日所載。

研究室めぐり 愛知大学華日辞典編さん所

三十七年には大辞典刊行 最新、完全な編集目指す

○：愛知大学の前身、上海の東亜同文書院大学が、昭和五年以来終戦まで進めてきた華日辞典編集の計画を受け継いで、『最新にして完全』な華日大辞典の完成を目指すのがこの編さん所。

同大学では、この辞典編集事業創始者の一人、鈴木沢郎教授と、新たに迎えられた元同文書院大学予科教授、内山正夫氏、台湾から迎えた婦人講師張祿沢さんの三人が中心になり、各学部教授スタッフを協力メンバーにして、三十年三月から編さん所を開設、本格的な編集を再開した。

○：中国古典から、最新の雑誌まで利用できる完全な辞典——これが華日大辞典編集の目標だが、最初の一年間は送られて来た基本カードの整理。この作業が終ってやっと基本カードの増補工作に移った。つまり、戦後に作られた新語、新用例を、あらゆる資料から見つけ出して、新しい時代に即応する辞典の基礎を作る、根幹的な仕事だ。

○：それにはまず戦後に国内外で刊行された「同音字典」「学文化辞典」「新華字典」など、多くの辞典との比較、対照が行われる。同時に変動を続ける新中国に生れる無数の政治、経済用語、それに新聞用語などを記録する（ロ）の工作も並行して行われる。

「中華人民共和国憲法」「毛沢東選集」「人民日報」「学習」などがこの資料になる。

こうした仕事のためには、学内各学部教授の緊密な協力が必要だが、老舎の翻訳で知られる教養部桑島信一教授や法経学部池上貞一、川崎一郎講師らの努力で、現在まで（イ）の工作が三分の一近く進み（ロ）の工作も順調に滑り出した。

○：同編さん所の計画では（イ）（ロ）の工作は三十五年に終り、三十六年に全カードを整理して、三十七年には大辞典刊行の予定だが、それに先立ち「中国現代語辞典」（仮称）出版の計画が去る四月から進められている。これは中国と関係のある実務字や、研究者の必要に応じて作られるもので、大辞典にはそのまま資料として活用出来るもの。出版の見通しがつき次第、直ちに編集に移る予定だ。

〔注〕朝日新聞 昭和三十二年七月二六日所載。

四年後には完成

—— 華日辞典 ——

本学教授 鈴木 沢 郎

一

中国語の研究は、中国においても、わが国においても、その他の外国においても、極めて歴史の浅いものである。従って中国語辞典も極めて不満足なものしかなかった。辞典がないために中国語研究は進歩しない、という悪循環の中に立った。

われわれが中国語辞典を編纂しようという念願をおこしたのは、こういう中国語学界の状況にかんがみるところがあったからである。即ち常時日華両国人ほぼ同数で合計十、五人の中国語研究家を擁し、地理的条件にも恵まれていた同文書院こそやるべきであるということになり、当時の学長大内暢三氏（本学大内義郎教授厳父）の要望もあり、華日大辞典の編纂に発足したのであるが、それは昭和八・九年の夏であった。以来、終戦にいたるまで工作が続けられ終戦の際接収された原稿カードは役十四万枚に上っていた。

二

終戦後だいが月日も過ぎ、中日交通もかなり開けてきた昭和二十八年七月、終戦時の東亜同文書院大学学長であった本学前学長本間先生の慫慂により、中共に対して前述のカードの返還を申請することにし、日中友好協会理事長内山完造氏に仲介の労を願い、手紙を中国科学院院長郭沫若氏、及び接収の際直接接収に当たった鄭振鐸氏に送った。

十月四日内山氏から来信あり、九月四日付の先方からの手紙では、現物のありかがわかったから、改めて人民中国日本語版編集部に出示せよとのことであったので早速表示のとおりにした。

二十九年五月になってから、「保衛世界和平委員会劉貫一」の名義で、「このカードは敵産として没収したものであるから、返還はできないが、日中文化溝通のために、改めて日本人民に贈与する」旨の返事が日中友好協会へ来た。返還を熟望したものがいよいよわれわれの手にかえって来た、うれしくもあるが、また、これはたいへんなことになったという相矛盾した複雑な感に打たれた。この原稿カードは九月二十七日帰還船興安丸で舞鶴に到着し、一応東京へ送られ、日中友好協会と従来の関係者等協議の上、原稿カードは愛大へ引渡し、完成せしめることになり、カードは十二月八日本学へ到着した。

三

本学では、いよいよ華日辞典編纂を決心し、この辞典には原来の関係者である元東亜同文書院予科教授内山正夫氏を三十年四月専従者として招聘し、専心これに当つてもらふことになった。

五月には華日辞典刊行会が成立し、その中に評議員会、編纂委員会が設けられた。三〇・七・九当時の評議員、編纂委員は左の通りである。

評議員

本間喜一（学長）、小岩井浄（法経学部長）、山崎知二（文学部長）、伊藤武雄（日中友好協会理事長）、鈴木沢郎（本学教授・元書院大学教授）、熊野正平（一橋大学教授・同上）、野崎駿平（東北大学教授・同上）、坂本一郎（神戸学大教授・同上）

編纂委員

専門委員 鈴木沢郎、熊野正平、野崎駿平、坂本一郎、桑島信一、内山正夫、尾坂徳司、池上貞一、張祿沢
協力委員 小幡清金、胡麻本萬一、松浦治七、松葉秀文、三好四郎、杉本出雲、黒木三郎、川崎一郎

四

本辞典編纂の仕事は、基本カードを整理し、その後に出た中日両国及び英、露両国の中国語辞典、各種専門辞典との対照補充、その他の新資料からの新語のとり入れなどであるが、社会組織と思想の一変した新中国に生れた新語もおびたしく、また死滅しつつある語も少なくない、これらの蒐集と整理は、本編纂処の仕事である。革命以来、中国に於けるこの方面の研究、出版も盛んになつて来たので、資料はかなり豊富である。本編纂処の最も重視しなければならないことは、資料の蒐集と人材の糾合であり、先だつものは資料費であり、人件費である。この面においては、三十一年五月文部省はわれわれの機関研究を採択され、百三十万円の助成金が下付された。三十二年四月には、当地の或る実業家がこの事業に対し、三年間継続で相当金額の資金を援助する旨申出られたので、有難くこれを受けることにした。人材の方面では今年春、元通訳官、外交官本学講師遠藤秀造氏、東北大学中国文学科卒業後、特別研究生五年の経歴を有する志村良治氏を、八月には元拓殖大学教授、NHK海外放送担当当者宗内鴻氏を本編纂処専任として招聘して、陣容が一段と強化された。

更に八月には某新聞社からの要望で、中国現代用語辞典を一ヶ年間に編纂出版することとなり仕事をすすめている。この現代語辞典の内容は、将来は大辞典の一部をなすものである。尚、目下中国においては文字改革が行われており、最後の目標中国語の標音文字化に至る過程において、標音文字、簡化文字の公布実施、標準語の決定、標準語の

3-1 c (10)

語音、語法、語彙の規範化、標準語の普及等多くの改革が目下進行中であり、困難な問題が残されている。それらの決定は直接華日辞典の編纂方針に影響を与えるものである。本辞典はこれらの改革が一応の落着きを見てから出版されるのが適当である。しかしその理由ばかりではなく、本辞典の規模から云っても早急の完成は困難で三十六年出版が予定されている。

〔注〕愛知大学新聞 第八九・九〇号（昭和三十三年十一月十五日）所載。

執 筆 基 準

1961.10 整理・改正

目 次

前言

A) 見出字		E) 符号について	23
(I) 見出字		(I) . 黒点	23
(II) 見出語	5	(II) , コンマ	23
B) 表音について	5	(III) : コロン	24
(I) 字体	5	(IV) - ハイフン	24
(II) 声調	9	(V) ? 疑問符 ! 感嘆符	24
C) 排列	10	(VI) 標点符号	24
(I) 見出字	10	(VII) () 括弧	24
(II) 見出語	10	(VIII) ~ 省略符号	25
(III) 見出語で省略してもよい字のある場	10	(IX) []	26
合	11	(X) ⇒ イコール矢印	26
(IV) 見出語の集中について	13	(XI) → 参照符号	26
(V) 重畳形について	14	(XII) = 等符号	26
(VI) 形容詞・副詞の語尾〔的〕〔地〕の	15	(XIII) ↔ 対立符	26
処理	15	(XIX) — アンダーライン	27
(VII) ローマ字の取扱い	16	(XV) …	27
D) 解説について	17	F) 略号	27
(I) 分類	17	(I) 同前. 同上. 同下	27
(II) 日本語	18	(II) 発音上の略号	28
(III) 中国語	20	(III) 言い方についての略号	29
(IV) 外国語	20	(IV) その他の略号	33
(V) 学名	20	(V) 略号の位置について	33
(VI) 数字	20	(VI) 略号使用例(補遺)	33
(VII) 同義語・類義語	21	G) 文字について(雑)	34
(VIII) 段落	21	(I) 品詞	34
(IX) 並列	21	(II) 文の構造	35
(X) 姓・複姓	22	目次うら 軽声について	(2)
(XI) 人名用字	22	化音の表記について	(3)
(XII) 地名用字	22	付録 (I) カード整理上の諸注意	45
(XIII) 訳音字	22	(II) 整理の分担区分	47
		(III) 現在(1960.10.7)の編集方針および 進捗状況の大略	48
		(IV) 語詞採録のための文献資料	49

軽声について

① 詞（あるいは文）に注音する場合、音節の強さを次の段階に分けて表示する。

- ④ 常に元来の声調に発音されるもの。〔参加〕 cānjiā
 ⑤ 場合により軽声あるいは元来の声調に発音されるもの。◦印を注音。
 綴りの前につける。〔刚才〕 gāng◦cái 〔残疾〕 cán◦jī 〔请教〕 qǐng◦jiào
 なおこの⑤に属するものは特に吟味してえらび出す。
 ⑥ 常に軽声に発音されるもの。・印を注音綴りの前につける。

〔情形〕 qíng・xíng

この常に軽声に発音されるもののうち、特定のものには声調符号をつけない。

その範囲は次のとおりである。

語気詞 了・le 啦・la 的・de 哪・na 呢・ne 哩 啊 呀 吧 吗・ma

接尾字 着了 们的 地・di 子・zi 头 儿 么・me

量詞 个

名詞重叠詞 哥哥 星星

その他 2 字目が常に軽声に発音される重叠形 〔油汪汪儿地〕 yóu wāng・wangr・di

〔乖乖〕 guāi・guai 〔混混儿〕 hùn・huer

特殊名詞 衣裳 葡萄 （その他、“同音字典”による）

動詞・形容詞の後の 得 と 不

注意 〔得〕〔的〕〔地〕〔子〕に関する使用上の心得。

- ① 可能不可能をあらわす〔得〕は必ず〔得〕と書く。

〔拿得动〕 ná・dedòng

- ② 程度・状態をあらわす〔得〕は〔的〕と書いてもよい。

〔说得好〕〔闹得他……〕〔走得快〕（以上〔的〕でもよい）

- ③ 副詞接尾字の〔地〕は必ず〔地〕と書く。〔的〕と書いてはならない。

表音は di の軽声・di とする。

〔渐渐地〕 jiàn・jiān・di

- ④ 接尾字の〔子〕は zi の軽声・zi とする。

〔孩子〕 hái・zi 〔桌子〕 zhuō・zi

②補足語の軽声表記については次の基準による。

- ① 趨向補足語 〔走开〕 zǒu・kāi 〔走起来〕 zǒu・qǐ・lái
 〔念下去〕 niàn・xià・qù 〔写出来〕 xiě・chū・lái
 可能補足語 〔看得见〕 kàn・dejiàn 〔回不来〕 huí・bulái
 〔念不下去〕 niàn・buxiàqù 〔写不出来〕 xiě・buchūlái
 程度 〃 〃 〔跑得快〕 pǎo・dekuài
 若干の結果 〃 〃 〔听见〕 tīng・jiàn 〔拿开〕 ná・kāi 〔急死〕 jí・sǐ
 ② 上記に目的語が入った場合
 趨向補足語 〔拿出一本书来〕 ná・chū yībēnshū ・lái

[说起话来] shuō · q i huà · lái

この場合、目的語の前も後も軽くなる。

可能 〃 〃 [想不出办法来] xiǎng · bu chū bàn · fǎ · lái

[写不出字来] xiě · bu chū zì · lái

この場合、目的語の前は強く、後は軽くなる。

㉞ [过] [进] [回] [成]

[走过来] zǒu · guò · lái

[拿进来] ná · jìn · lái

[送回去] sòng · huí · qù

[说成] shuō · chéng

- ③ “轻声词彙”に収められている詞はすべて轻声と認める。
 ④ “汉语词典”で(・)轻声になっているものは全部轻声㉞の部とする。
 ⑤ “汉语词典”で・轻声になっているものは全部轻声㉞の部とする。
 ⑥ “轻声词彙”にだけ載っていて“汉语词典”にないもの、または“汉语词典”に元来の声調符号だけが附いているものは轻声㉞か㉞に入るが、その決定はその都度検討してきめる。

儿化音の表記について

- ① [儿]字をとまうことによって变化した発音はそのまま記載する。

in + er	→	ier	今儿 jīer	信儿 xìer
un + er	→	uer	村儿 cūer	唇儿 chuíer
ün + er	→	üer	裙儿 qúer	
i + er	→	ier	细儿 xìer	鼻儿 bìer
ui + er	→	uer	嘴儿 zuǐer	
翘舌葉声 + er	→	er	事儿 shèr	翅儿 chìer
平舌葉声 + er	→	er	字儿 zìer	子儿 zǐer
ü + er	→	üer	鱼儿 yúer	女儿 nǚer

以上の場合以外の音節にはすべて r だけを加えればよい。

a + er	→	ar	花儿 huār
ai + er	→	ar	牌儿 páir
an + er	→	ar	圈儿 quār
ao + er	→	aor	好儿 hǎor
e + er	→	er	节儿 jiér
ei + er	→	er	味儿 wèr
en + er	→	er	门儿 mēn
iu + er	→	iur	球儿 qiúr
o + er	→	or	婆儿 pór
ou + er	→	our	猴儿 hóur

u + er → ur 股儿 gǔr
 uo + er → uor 错儿 cuòr
 ng + er → ngr 方儿 fāngr

四声符号は主要母韻の上につける。

今儿 jīer 节儿 jiér
 鱼儿 yúer 月儿 yuèr

このように同じつづりでも四声符号の場所が異なる場合がある。

- ② [儿] 字をつけてもつけなくてもよい場合の表記は次のようにする。

剧本(儿) jùběn(bér) 地方(儿) dì · fāng(r)
 小帽(儿) xiǎomào(r) 慢慢(儿)地 màn·mǎn(mǎr) · dì

以前に、～という注音のしかたもあったが、この方式は使わず、上例のように()を用いて注音する。

執筆基準(第11次改正)

1961.10

前言

本辞典では次の三つを基本としている。

- ① 使用漢字は中国のすべての簡体字を用いる。
- ② 発音表記法は“漢語拼音方案”を用いる。
- ③ 配列は上記の表記法によるアルファベット順とし、さらに声調の区別によって順序を定めて配列する。

A) 見出し

(I) 見出字

- ① 見出字は簡体字を書いた後に繁体字をならべて、同じ[]内に示し、間を黒点・で区切る。

例 [标·標] biāo [临·臨] lín [业·業] yè

- ② 纟 衤 亠 讠 の4個は、単独で用いられない。偏のときだけ用いられ、つくりには応用されない。

例 鉴 餐 罍

- ③ 金へん・食へんには、それぞれ、衤 衤 亠 亠 の二通りの書きかたがあるが、筆写体としては衤 衤の方を採用しておく。

- ④ 今後のこの種の変化に対しては、そのつど従ってゆき、以後の工作に必ず使用する。

- ㊦ 偏旁簡化表の使用にともない、従来の簡体字の一部は見出字に表示しない。

例 [鸡・鷄 (雞)] この字は第二批で[鸡]と簡化されたが、その後、偏旁簡化により[鳥]は[鸟]と書かれることになり、その結果[鸡]と簡化された。中間的な[鸡]の字は自然的に不必要と思われるため、見出字としてかかげないことにする。

その他の例 [鋳・鑄] (鋳を省く) [輛・輛] (輛を省く) [驢・驢] (驢を省く)
[购・購] (购を省く) [舰・艦] (舰を省く)

- ㊧ [辯] [辯] [滂] [衛] [儲]などは、偏旁簡化を適用するかどうかの問題について各字について検討し、だいたい二つの場合に分けられる。

偏旁簡化を応用しないもの。[衛] [辯]

偏旁簡化を応用するもの。[滂] [儲]などは、許に彳(さんずい)のついた形、諸に亻(にんべん)のついた形と見なされるため、簡略化して[滂] [儲]とする。

中国側で大体以上のような傾向があるらしく思われるので、今後その方針で簡化できるものは簡化してゆく。

- ㊨ [寬]の字はいろいろ文献を調査した結果、[寬]とする。点は打たない。

[殤] [觸]などの字は偏旁簡化を応用するかどうか問題であるが、とりあえず[易]の部分だけを簡化して[殤] [觸]としておく。すなわち、[傷]の字の応用によって[觸]などとしてしまうことは避ける。(“新华词典”に同じ)

- ㊩ [厂] [广]は、それぞれもと[庵]の簡体字として通用していた(“漢語詞典”1094頁)。しかし、現在では[厂]は[廠 chǎng]の簡体字、[广]は[廣 guǎng]の簡体字として正式に用いられている。本来ならば[厂] [广]とも[庵]の略字であったことを表示すべきであるが、例えば[广・廣] guǎng ānと注音して、ānまでをguǎngのところに表示するのは辞典の利用者を混乱させるだけで、あまり意味がない。またこれを除去してもたいして不都合ではないので、このānは取り除くことにする。(“新华词典”に同じ)

- ② 異体字は“異体字整理表”にもとづいて、正体字と認められたものを前にし、整理された異体字は()内にかこんでならべる。

[楞(楞)] lèng [杯(盃・栴)] bēi [据(據(據))] jù

- ㊰ 異体字の範囲について

㊰ ① “異体字整理表”に載せられている異体字は全部載せる。

㊰ ② 上記②以外に“同音字典”・“漢語詞典”にある異体字も載せる。この場合、“同音字典”と“漢語詞典”の取り扱いが異なる場合は、“同音字典”に従う。

[总・總(總・摠・摠・摠・摠)] zōng

㊰ ③ [草麻油]の[草]のように、本来は[蒞]であるが、[草]を一時借りてきて使用している場合、[草]にはもともと意味があり、この二つは正体字と異体字として取り扱うことはできない。このような場合は次のように処理する。

[草] bì | [麓] bì
 ⇒ [麓] bì | = [草] bì …

⑩このほかに正式ではない略字や異体字などがたくさんあるが、それらの字の採用ほど慎重に行う。

[蹇]に対する[窳]は採用する（これは正式な簡体字ではないので、異体字として取り扱い、[蹇・蹇（窳）]として採用しておく。

ほかに[擧]に対する[番]などは、未だ圧倒的に使われているとは言えないので採用しない。

なお、[秒]など近来使われるようになった字で“同音字典”、“漢語詞典”にないものは積極的に見出字として採用する。

⑪合成略字の処理について

① [𠃉] [𠃊] [𠃋]などを合成略字という。

②合成略字は巻末に合成略字表を設け、一律に表示する。

③合成略字は筆画索引の中にすべて採用し、合成略字表を見るよう指示する。

例	园	yuán	967	
	国	guó	294	総画索引の場合、
	囿	→合成略字表 1050		図書館の略字 囿 が国の次に来る。
	图	tú	799	
	困	jūn	438	

④合成略字はまた本文中にも入れる。ただし、略字自体の発音はなく、読む場合は合成される以前の形に復原して読まれるため、見出字としてかかげることはできない。

であるから、それぞれのもと語の注釈の中で説明することにする。

例 [图书馆] túshūguǎn 図書館：[囿]は合成略字。

[千瓦] qiānwǎ キロワット：[𠃉]は合成略字。

注意 [甬] [舜] [歪]などはこの字自体すでに発音をそなえ、正式な語として通用しているので合成略字と見なさない。これらの字はふつう一般に通用している呼び名を用いて合体字と言う。説明のしかたは次のようにする。

例 [甬] béng [不用 búyòng]の合体字。

⑫ [- 儿, - 子]または[- 儿]または[- 子]について

見出字の解説にあたって、ある意義グループには[儿]や[子]を接尾字にとることがかなり認められるときがある。その場合、該当項の注釈の冒頭に[- 儿, - 子]（あるいは[- 儿]または[- 子]）を置き、その項の意味のときは[儿][子]がよくつくということを表示する。なお下例が示すように、その注釈内の“～”符号は、見出字をふくめ、それに[儿][子]をつけたいずれの場合にも通じて用いられることをあらわす。もし[儿][子]をつけてはならない例、またどちらか一方しかつかないとはっきりわかっている例を出す場合、“～”符号は用いないで実字

をあてる。

例㉑ 〔帮・幫(幫・幫)〕 bāng

①…… ②[・儿, -子]側(がわ) 〔菜 cài~〕……, 〔鞋 xié~〕……。

例㉒ 〔椅〕 yǐ

①[・子]いす。〔一把 bā 椅子〕いす一つ。〔桌 zhuō 椅〕テーブルといす。
〔藤 téng~〕とういす。〔太 tài 师椅〕……。

例㉓ 〔枣・棗〕 zǎo

[・儿]なつめ。〔红 hóng~〕……, 〔枣泥 ní〕……。

例㉔ 〔刀〕 dāo

[・儿, -子]刀。ナイフ。刃物。〔菜 cài~〕……, 〔铤 xī 刀〕……。

例㉑の〔菜~〕は、すなわち〔菜帮〕〔菜帮儿〕〔菜帮子〕の三通りのいずれにも読んでよいことをあらわす。例㉒の〔一把椅子〕は、すなわち〔一把椅〕とは読まないことをあらわし、実字をあてる。〔藤~〕は〔藤椅〕でも〔藤椅子〕でもよいことをあらわす。

㉕ これらが見出語として採用された場合は、次のように処理する。

例㉑ 〔菜帮(儿)〕 cài bāng(r) = 〔菜帮子〕…

〔菜帮子〕 cài bāng · zi ⇒ 〔菜帮(儿)〕

例㉒ 〔帮(儿)〕 bāng(r) → 字解②

〔帮子〕 bāng · zi → 字解②

㉖ 次のような場合は訳語を変える。

〔瓣〕 bàn

①花卉。〔花~(儿)〕花びら。②……。

〔瓣〕という一字の場合は文語とみなされるから“花卉”という訳語を用い、〔花瓣(儿)〕の場合は日常の口語であるから“花びら”という訳語を用い、そのニュアンスのちがいを出すようにつとめる。

㉗ 見出字の解説中に出す用例はなるべくその見出語に出せないもの(その字で始まらない語)を用例として出し、重複を避けるようにする。たとえば、〔口〕の字解に〔开~说话〕〔一~刀〕〔关~〕などを載せ、見出語のほうに〔口才〕〔口气〕などを出す。もし見出字の字解に〔口才〕を出した場合、見出語の〔口才〕の項は

〔口才〕 kǒu cái → 字解② とする。

㉘ 同一の語を見出字の用例として、また見出語として重複させて出してもかまわない。しかし、それは1, 2の例にかぎり、なるべくなら重複させないことをたてまえとする。この場合二つの処理法がある。

⑦どちらかを → で導く。

⑧両方に注釈をほどこす。この場合は叙述のくいちがいがないように注意する。

⑥注音字母 ウタロロ…… ㄇ ㄆ ㄨ など一律に見出字として採録しない。

⑦カードの処理について

例③ [当・嘗・嚐] dāng dàng diāng

A) dāng (I) [当・嘗] ①…… ②…… ③…… (II) [嚐] ……

B) dàng [当・嘗] ①…… ②……

C) diāng [嚐] ……

以上の場合、dàng および diāng の派生カードの処理は次のようにする。

[当] diāng ⇒ dāng C)

すなわち、派生カードには簡体字だけを書き、いちいち [当・嘗・嚐] などと繁体字・異体字を表示しない。

例④ [杆(桿)] gān

A) gān (I) [杆] ①……

gān と (I) の間を1字分あける。

A) gān [杆] [- 儿, - 子]……

[- 儿, - 子]がついて、しかも前に繁体字・異字体を示す場合は、しばらくこのとりきめに従って処理する。[杆] のかつこは大きく、

A) gān [- 儿, - 子]……

[- 儿, - 子] のかつこは小さい。

例⑤ [脍(脍・脍)] gē gé

A) gē [脍(脍)]

B) gé [脍]

上記のように A) の方で [脍(脍)] と2字を入れ、それが gē の系統であることを明示する。同様の例で

例⑥ [同(仝・衛)] tóng tòng

A) tóng [同(仝)]

B) tòng [衛]

すなわち、A) は [同(仝)] が tóng に属し、B) の tòng は [衛] だけであることを明示する。もし、tóng として何も示さないと、A) の tóng は [同] [仝] [衛] の全部に通ずる音であると疑問を持たれるおそれがあるため、全部系統を明示する方針をとる。

例⑦ [胡] [鬪] [衛] の処理について

これは見出語をふたつに分けて表示する。

[胡・鬪] hú

(I) [胡] えびす。

(II) [鬪] ひげ。 → [胡(衛)]

[胡(衛)] hú

[~同儿 tòngr] ろじ。 → [胡・鬪]

上例のように同一の簡体字にそれぞれ別の繁体字・異体字がつく例であるが、これをひとつにして〔胡・鬍(鬚)〕とすると、あたかも〔鬍〕の異体字が〔鬚〕であるように思われてしまい、つごうが悪いので、やむなく〔胡〕をふたつに分けて表示する。そして相互に参照符号を用いて導いておく。

(II) 見出語

- ① 簡体字・正体字であることを別に示さずそのまま用いる。引用例文も同様にする。

〔杂志〕 zázhi

〔钢铁〕 gāngtiě と見出語を出し、〔~挂 guà 帅〕と用例をつける。

- ② 共通文字の見出語

同じ字の見出語で、意味も発音も異なる場合は、別カードとする。

〔拔丝〕 bāsī …….

〔拔丝〕 bàsī …….

見出語の場合にも[- 儿, - 子]をつける。すなわち、〔病根〕などの〔儿〕〔子〕のつきうる見出語は、見出字の場合(基準P.7~P.8参照)と同じく解釈の先頭に[- 儿, - 子]を入れて処理する。

中国語に入った日本語あるいは日本語と同じ意味で使われている中国語などは、なるべく保存するよう努める。ただし、わざわざこの種の語をあさって載せるのではなく、従来あるカードを処理してゆく段階で出てくるものを捨てずに残しておくという程度にとどめる。

例 百货店 赤字 配给 场合 进度 速度 社会 条件 基本
方法 幸福 干部 重要 希望 动作 象征 など。

上例のように全く日本語と同じと思われるものでも、はたしてそれが中国でも同じように使われているのか、あるいは別の意味でつかわれているのかなどという疑念を解くためにも一応のせておく。ただし“料理店”や“折返”など問題のあるもの、吟味を要するものは気をつけて取り除く。

B) 表音について

(I) 字体

“漢語拼音方案”を採用し、ローマ字の字体はなるべく印刷体 (a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z) で書く。

(II) 声調

- ① 符号は直観式符号を採用する。

一 第一声 (上平声)、/ 第二声 (下平声)、∨ 第三声 (上声)、\ 第四声 (去声)

この符号は音節の主要母音の上につける。

〔一〕 yī 〔国〕 guó 〔脚〕 jiǎo 〔试〕 shì 〔接〕 jiē

〔远〕 yuǎn 〔永〕 yǒng 〔丢〕 diū 〔退〕 tuì 〔又〕 yòu

- ② 轻声について

詳細は2ページにかかげてある。

③ 声調変化

㉔第三声の字が続くときは、変化した結果ではなく、元来の声調を示しておく。

〔永远〕yǒngyuǎn 〔好几个〕hǎojiǐ・ge 〔洗脸水〕xǐliǎnshuǐ

㉕〔一〕〔七〕〔八〕〔不〕や、〔快快（儿）地〕の第二字目の〔快〕などのように、前後の関係で特殊な声調変化をする字には、変化した結果の声調だけを示しておく。

〔一个〕yí・ge 〔不是〕búshì 〔渐渐地〕jiànjiàn・di 〔第八课〕dìbā(bá)kè

④ 儿化音

詳細は3ページにかかげてある。

“異読詞整理表”について

第一批及び第二批の“異読詞整理表”は、ともに原案に全面的に従う。（第一批すなわち初稿については、1957年10月に辞典室で協議訂正した部分は、これを撤回し原案通り従うこととする）

C) 排列

(I) 見出字

① 見出字の排列は注音つづりのアルファベット順とし、さらに声調符号の第一声・第二声・第三声・第四声の順に排列する。

② 同音・同声調の字の排列は画数順によるが、同じ形の機構が備わっている字（とくに同一の音符と限定はしない）はまとめる。

㉖同じ形の機構によってまとめられた各グループの順序は、各グループのもっとも画数の少ない字の総画数によって、画数の少ない字のグループを前に排列する。たとえば yān の項の咽 烟 胭 では、因（6画）が共通の機構であるが、咽は総画数（9画）であり、奄（8画）のグループの後に排列する。

ただし、繁体字と共通の機構を有する字のグループは、その簡体字と同一グループとして筆画順に排列する。たとえば lú の項で卢 沪 榼 臄 は同一グループとする。（榼と臄には簡体字はない）

③ いくつもの字音があるときは、その字音を全部かかげ、その排列はもっとも重要な字音（本来の字音やもっとも使用頻度の高い字音を先にし、その判定は“同音字典”と“漢語詞典”による）のところにすべて集中して示す。

〔着〕zhuó zháo zhāo ・zhe

(zháo zhāo ・zhe の各該当カードにはそれぞれ ⇒zhuó B) ⇒zhuó C) ⇒zhuó D) としておく)

(II) 見出語

① 同一見出字内の見出語は、第2字目の順序（見出字と同じ）で排列する。2字目まで同一字であるときは第3字目の順序による。第3字目以下が同一字であるときもこれに準ずる。

② 二つ以上の発音がある場合はそれを並べて間を ， で区切る。

〔早起〕zǎo・qǐ ， zǎo・qǐ

(アンダーライン____については 27 ページ E) (XIII) を参照のこと)

この場合、又音 符号は使わない。

ただし“儿化音の表記について”の②の方法で表示できるものはその方法による(4 ページ②参照)

- ③ [白]における **bái** と **bó** のように同一意味に対して二つの字音が通用している見出字の見出語は次のようにする。

[白]で始まる見出語を全部口語音の **bái** の方へ集め、**bó** は単に読音としてのみ存在することを示す。その見出語のなかで、特に **bó** の音がかかり使われているものだけ ☒bó~ と注音を加えておく。

[白天] **bái · tiān** [白玉] **báiyù** , ☒bó~

[白云观] **báiyúnguàn** , ☒bó~

- ④ 意味の異なる 2 音がある見出字の見出語は、字解のすんだ後にそれぞれのグループに分けて排列する。

[行] **xíng háng**

A) **xíng** ①…… ②…… ③…

B) **háng** ①…… ②…… ③…… ④……

xíng

[行动] **xíngdòng**

[行礼] **xínglǐ**

háng

[行市] **háng · shì**

[行伍] **hángwǔ**

この例の中で、[行] は大活字、その次の **xíng háng** A) **xíng** B) **háng** および見出語の前の **xíng háng** はいずれも肉太活字を使用する。また、見出語前の **xíng háng** はそれぞれその前後のカードとは別個にカード 1 枚を専用して表示する。

- ⑤ **gé jí** と発音が二つあって、一方に語詞が少ない場合は見出字の注釈のところで全部処理してしまい、見出語として表示しない。

[革] **gé jí**

A) **gé** ……

B) **jí** ……

この場合、**jí** の見出語がない場合、すなわち、見出語は全部 **gé** であるので見出語の前につける **gé jí** の見出しカードはつけない。

- ⑤ 簡体字のうち、相互に無関係な字義の異なる繁体字に対して、一つの簡体字が用いられている場合は、それぞれ別に字解を施し、見出語も繁体字によって区別して排列する。

例⑥

[系・係・繫] **xì jì**

A) **xì** (I) [系] ①……②……

例⑥

[干・乾(軋・乾)・幹(幹)] **gān gàn**

A) **gān** (I) [干] ①……②……③…

<p>(II) [係] ①……②……③……</p> <p>(III) [繫] ①……②……③……</p> <p>B) jì [繫] ①……②……③……</p> <p>xì [系]</p> <p>[系○]</p> <p>[系○]</p> <p>[系○]</p> <p>[係]</p> <p>[系○]</p> <p>[系○]</p> <p>[系○]</p> <p>[繫]</p> <p>[系○]</p> <p>[系○]</p> <p>jì</p> <p>[系○]</p> <p>[系○]</p>	<p>(II) [乾] ①……②……</p> <p>B) gān [幹] ①……②……</p> <p>gān [干]</p> <p>[干○]</p> <p>[乾]</p> <p>[干○]</p> <p>[干○]</p> <p>[干○]</p> <p>gàn</p> <p>[干○]</p> <p>[干○]</p> <p>[干○]</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

例◎

〔復〕のうちの〔复函〕の処置について。

〔复・復・複・覆（覆）〕 fù

(I) [復] ①…… ⑤ = [(III) 覆④] 返信。

(II) [複]

(III) [覆（覆）] ①…… ④ ⇒ [(I) 復⑤]

……

[復]

[复○]

[复○]

[复函] fùhán = [复信] [复书] [复文] 返信。 → [字解 (I) ⑤]

[复○]

[复○]

[复信] fùxìn ⇒ [复函]

┆

[複]

┆

[覆]

┆

上例のように〔復〕〔覆〕がかさなり合い、〔復函〕はもと〔覆函〕〔復函〕とも書かれたが、〔復〕の項と〔覆〕の項の双方にこの見出語を出すのは繁雑であるので、〔復〕の方にだけ表示し、〔覆〕の方には出さない、そして〔覆〕と〔復〕が通用されたことは見出字の方で解説する。

なお〔覆〕は〔覆〕だけの異体字で、その前の〔複〕〔復〕には関係がないわけであるが、その関係のしかたは字解の(Ⅲ)を見るとわかるので〔復・復・複・覆(覆)〕とならべて表示する。

- ⑥ 〔儿〕字をとまなう見出語は、表記した発音順にしないで、元来の字音に還元して、それに〔儿〕が独立して一字加わったこととして排列する。たとえば、〔八股儿〕bāgǔér は bā gǔ ér だということにして〔八卦〕bāguà の前に排列する。
- ⑦ 〔- 不了〕〔- 得了〕などは見出語としてとりあげ、全体的な説明を施すが、その上にまた実際の動詞・形容詞を伴った形〔办不了〕〔吃不得〕などをも見出語として適宜にのせ、用例を施す。本来ならば〔- 不了〕があるので〔办不了〕は不要なのであるが、この種のよく使われる語、特別の意味が出てくる語、意味合いがすこしずつ違って来る語などは適当に見出語としてのせるようにする。軽声をもつ見出語は、その軽声字をもとの声調の変化したものと考え、その声調のすぐ後に排列する。たとえば、〔孙子〕sūn・zi の〔子〕は z i の軽声化したものと考え、三声の z i のすぐ後に排列し、〔孙子〕sūnz i 〔孙子〕sūn・zi とする。

(Ⅲ) 見出語で省略してもよい字のある場合は、その字を()でかこむ。その取り扱いは次のようにする。

- ① 最後の字が省略できるときはカード1枚でよい。排列は全文字による。

〔萨尔(兰)〕sǎèr(lán) 〔药方(子)〕yàofāng(・zi)
 (兰)(子)も含めて排列する。

- ② 後から2字目以前に省略できる字があるときは、カードを2枚作っておく。省略した方のカードは全文字を書いたカードの方に ⇒ で導いておく。

〔碳(极)弧灯〕tàn(jí)húdēng ……
 〔碳弧灯〕tàn húdēng ⇒ 〔碳(极)弧灯〕

- ③ 上記②の場合、省略できる字のあるカード群をさらに他のカードへ集中する方法は次のようにする。

〔汞溴红〕gǒngxiùhóng = 〔红(溴)汞〕①……
 〔红汞〕hónggǒng ⇒ 〔汞溴红〕
 〔红(溴)汞〕hóng(xiù)gǒng ⇒ 〔汞溴红〕

(Ⅳ) 見出語の集中について

- ① 同じ意味の見出語群は、ある中心の語に集中するが、そのややこしい場合の処理のしかたについて

例④

〔猜拳〕cāiquán ⇒ 〔划 huá 拳〕“huà B) ”を見よ。

上例は〔猜拳〕が〔划拳〕と同じで、そこへ行けば説明があることを示すが、〔划〕huá は実は huà が中心の音で、そこに行かなければ〔划拳〕の注釈は出てこない。それで ⇒ としたあと

に続けて“ ”を見よ. と表示し、直接 huà へ行ってもらよう指示する.

例㉔

〔操琴〕 cāoqín ⇒ [彈 tán 琴] “dàn B)”を見よ.

〔疙瘩〕 gē · da

……

→ [圪 gē 答] [咯 gē 嚏] “圪 qī B)” “咯 kō B)”を見よ.

もう一つの場合、

→ [圪 gē 答]; [咯 gē 嚏] “kō B)”を見よ.

; を打つのは、そのあとにつづく [咯 gē 嚏] 以下と無関係であるという意味を持つ. そして
“kō B)” は [咯 gē 嚏] にだけ関係することをあらわす.

以上の諸点に関連して、⇒ あるいは → を用いて導く場合、2 段飛びを避けるための注音方法は次のようにする.

例㉕

〔咯〕 gē ⇒ k ā B)

〔扞拉〕 bā · lā ⇒ [拔 bā 拉] “bō”を見よ.

〔仵〕 yī ⇒ gé B)

〔疙瘩〕 gē · da

以上のように、⇒ k ā B) “bō”を見よ. などのように音を指示するだけで、ここに字は入れられない. 例えば [咯] gē で k ā の前に [咯] の字を入れなくても、まちがわれるおそれがないと考えられるからである.

例㉖

〔侧理纸〕 cè lǐ zhǐ = [苔 tái 笺] ……

以上のように=で集中した場合、[苔] は一声 tái が代表音であるが、いたしかたなく [苔] tái と表示しない. ㉔ ㉕ の各項で “kō B)” を見よ. などとしたような処理法をとらない. すなわち ⇒ と = の場合を分けて考え、= [] の場合はすぐ次に説明が来るため、とくに代表音を示さない.

㉔ 同じ意味を表す語で、形態上さまざまな言いかえのあるものについては、次のように処理する.

例 1. [阿司匹林] āsī pī lín アスピリン: [阿斯 sī 匹林] [阿斯比 bī 林] [阿斯匹灵 líng]

[阿士 shì 必林] [阿士匹林] ともいう.

以上のように字解 (アスピリン) のあとに類似語を並べ、[] [] ともいう. と書いておく. これらのカードは独立させて見出語として表示しない.

例 2. [奥林匹克] àolínpǐ kè オリンピック: [奥林匹 pǐ 克] [奥林庇 bì 克] [奥林辟 pì 克]

[亚 yà 林比克] [欧 ōu 林比克] [奥林比亚赛 sài 会] [世界运动大会] [世运 (大) 会] ともいう.

上例で [亚林匹克] [世运 (大) 会] などは 1 字目の発音が異なるので、独立した見出語として表示する. すなわち、1 字目が同じならば、見出語として掲げなくてもよいか、1 字目が違う場合は見出語として掲げることにする.

[亚林匹克] yàlínpǐ kè ⇒ [奥 ào 林比克]

[欧林匹克] ōulínbǐ kè ⇒ [奥 ào 林比克]

などとする. これは集中したカードの方には [] [] ともいう. と書いてあって、= []

[] として処理されていないが、このような場合も ⇒ を使用することをみとめる. つま

り = ⇒ の使用法に幅をもたせたわけである。ただし、注意されることは、このように処理することは上述のような特別の場合にかぎり、基本的には = ⇒ を使用して処理する。

(V) 重量形について

重量により意味や発音が変化するもの、また比較的常用されるものなどは見出語として出す。

(VI) 形容詞・副詞の詞尾〔的〕〔地〕の処理について

㊶ 形容詞にも副詞にも用いられる詞は、その詞尾を取り去って見出語にかかげる。

〔黑忽忽〕 hēihūhū (局部的・平面的に) 黒い、暗い。〔夜空黒、阴上来一片～の浓云〕 夜空に一面のまっくろな雲がかぶさってきた。

〔黑拉拉〕 黒ずんでいる。〔傍晚远远望见了～的一片树林子〕 夕方はるかに黒ずんだひとつの林が見えた。

上例のように見出語には〔的〕あるいは〔地〕をつけず、用例中に実字で示す。すなわち、この種の詞は用例を明示してその使われかたを示す。

㊷ 〔儿〕字をとまう副詞の見出語は次のように処理する。

〔怏怏(儿)(地)〕 kuàikuài·di , kuàikuāi·di , kuàikuàr(·di) , kuàikuār(·di)

上例のように〔儿〕および〔地〕をカッコに入れて見出語にかかげる。しかしカッコがふたつでどう読むのかまぎらわしく、誤解されるおそれもあるので、発音の方で調整し、ひとつひとつ読みうる発音のすべてを表示する。

㊸ 〔严重〕 yánzhòng 嚴格(な。に)。きびしい(しく)

〔滔滔〕 tāotāo 水がさかんに流れるさま。〔水～地流〕水がとうとうと流れる。〔～的水势)ととうとうとした水のいきおい。

上例のように形容詞・形容動詞としてもまた副詞にも用いられる詞については従来のように(な。

に)あるいはしい(しく)という方法で注釈する(参照 19 ページ③)。また〔滔滔〕のように用例には〔的〕

〔地〕を実字で示し、それぞれの使われかたをひとつひとつ例示する。

㊹ 副詞の〔好好(儿)(地)〕、形容詞の〔好好(儿)(的)〕はそれぞれ別々に見出語として表示する。

これは〔好好 hǎo〕と〔好好儿 hāor 地〕などのように用いかたにより、また発音によっていくらかずつ意味がちがってくる。それで読みうる発音のすべてにひとつずつ用例を添え、そのニュアンスのちがいを明示し、しかもそれを全部実字で表し、利用者に十分理解してもらうようにつとめる。

副詞の例。

〔好好(儿)(地)〕 hǎohǎo(·di) , hǎohāo·di , hǎohāor(·di) , hǎohāor(·di)

よつく。ちゃんと。きちんと。とっくり。念入りに。じゅうぶんに。〔有话好好 hǎo 说, 别急斥白脸的〕はなしがあつたらちゃんと言いなさい、そんなにせきこまないで。〔你好好脱了衣服坐着吃酒〕 (儒) まあゆっくり着物でもぬいで腰かけて酒を飲みたまえ。〔说得好好地, 怎么又变卦了?〕 立派にはなしがっていたのに、どうしてまた急に変更になったのだろう。

〔你好好儿等着, 我一会儿就回来〕 おりこうに待っていらっしやい、すぐもどって来ますからね。〔你好好收拾屋子〕 おまえはきちんと部屋をかたづけなさい。〔一笔一画好好地写

清楚] 一点一画をていねいにはっきり書く。[放了假咱们好好儿地玩几天] 休みになったら、ぼくら思う存分何日か遊ぼう。

上例のようにすべてを表示し、訳語を加え、用例はひとつひとつ実字であらわし、懇切にとりあつかう(なお2番目は儒林外史の用例で〔的〕を〔地〕になおさず原文のまま採用する。下の㊤参照)

形容詞の例。

〔好好(儿)的)〕 hǎohǎo(・de) , hǎohāo・de , hǎohǎor(hǎor)・de

よい。たいへんよい。立派である。申し分ない。これ以上はない。問題ない。[他真是个好爷爷] あの人にはほんとうに好々爺(こうこうや)だ。[好好的一条道你为什么不走?] 申し分のない道なのに君はどうして通らないのか。[好好的你干么又伤心?] 問題はないはずなのにどうしてまた悲しんでいるのか。[好好儿的一笔买卖叫他给搅散了] ほくほくのうまい商売をあいづにかきまわされてふいにされてしまった。[好好儿的东西别糟踏] けっこうなよい品物をだめにしてはいけない。

上例のように形容詞としての〔好好(儿)的)〕は hǎohǎor , hǎohǎor という言い方はないので、そこをまぎれないように表示する。

㊤この副詞詞尾の〔地〕、形容詞詞尾の〔的)および〔底〕は、各種文献から用例をとって、その出典をあげる場合には、原文のまま採用する。〔的)を〔地〕になおすべき例でもそのまま改めずには置く。すなわち、その作家の習癖・作風などを忠実に伝えようとする意図からこの種の改変は行わない。ほかに同じような例として〔么)〔吗)〔吧)〔罢)なども原文のままをとり、書きかえない。ただし簡体字・異体字に関する書きかえは完全に行う。

○出典をあげない普通の例の場合は、上述のような書きかえはすべて完全に行う。

(VII) ローマ字をそのまま見出語のなかに使ってある場合、表音の部分は、そのままそのローマ字を書き、排列はアルファベット順とする。

〔K金〕 Kjīn …… (kā の発音の見出字の前に置く)

〔三K党〕 sānKd āng …… (〔三〕の見出語の中の kā の前に置く)

D) 解説について

(I) 分類

- ① 単字では語にならない見出字は、その字を使ってできた語を用いて説明する。この場合、㊤その見出字のカードの注釈として取り扱う場合と、㊤その見出字の見出語として取り扱う場合、㊤他の見出字あるいは見出語の注釈に → で導いてすませる場合の三つがある。

例㊤の㊤ 〔玻〕 bō 〔～璃・Li〕 ガラス。

例㊤の㊤ 〔梓〕 bàn 〔～子〕 まき。

例㊤ 〔荜〕 bí → 〔荜芥〕

〔荜芥〕 bí・qí = 〔地 di 栗〕 〔地梨〕 〔西水慈姑(みずぐわい) : ふつうのくわいと異なって、甘味が多く生食される。→ 〔慈 cí 姑〕

例㊤の㊤ 〔襪〕・de → 〔襪 lē 襪〕

例㉔の㉔ [襪]・de [襪 lě~] 衣服がだぶだぶで見苦しい。

㉔ 例㉔の㉔の方法をとる場合は、注釈が簡単にすむ場合である。

以上、例㉔㉕㉖を通じてわかるように、→ を用いて他の字・語へ導く場合、[] の中はすべて実字を用いる。また、上述の原則によって → [○○] とした場合に、それが中心語でない場合は、中心語に直接 → で導く。

[蟹] bān → [班 bān 猫]

[班猫] bānmāo = [蟹螯 bānmāo] 蟹はんみょう。

㉕ [蟹螯] は他の場所に見出語として出ることはないので全部注音しておく。

㉕ 二字目以後の“生僻字”について、見出語の二字目以後に“生僻字”が出てきて、その字が“同音字典”、“漢語詞典”にもない場合、それらの“生僻字”は一律に見出字としてかかげることとする。この場合、[葡] pú → [葡萄] とするものと、見出字に注釈を加えるものとある。

㉖ 見出字・見出語に幾とおりもの訳語があるときは、意味の系統が異なるごとに、①②③……の記号を用いて分類する。さらにその分類内で細分を必要とする場合は、小文字の㉔㉕㉖……の記号を用いて分類する。

[波] の字の用例として [秋波] を用いる場合、[秋波] には2つの意味がありこれを㉔㉕の記号を使って書きわける。(㉔㉕は見出字の字解または見出語にいくつかの意味がある場合に用いられるものであるが、[秋波] の場合などには特別に用いることとする)

[波] bō ①…… ②…… ③目つき。まなざし。[秋~] ㉔秋の波。㉕女のこびる目つき。③……

㉖ 訳語は一つであるが、語義が二つ以上に分かれる場合は、訳語の後を一字分あけて、①……、②……、とする。

[欧耳] ōuěr オール ore ①デンマーク・スウェーデンの補助貨幣…… ②ノルウェーの補助貨幣 ([1克 kè 朗] が [100~] にあたる)

㉔上例の () 内は ([1 克朗] が 100 オールにあたる) としてもよい。しかし ~ のかわりに実字をあてることはしない。

㉔注釈中にいくつかの事項を並列して説明する場合は次のようにする。

上記③の例のようにしないで、. の後にすぐ①②③を持ってくる。

[三大作风] sāndàzuòfēng 中国共産党政治の三つの大きなやりかた。すなわち、①理論と実践の結合、②人民大衆との緊密な連携、③批判と自己批判。

㉕ 成語・諺語など長い見出語のとりあつかいについて

㉔ 成語・諺語などで見出語が長くなる場合でもそれらはつとめて採用するようにする。

㉕ またその成語・諺語をどこからでも引けるようつとめて親切にとりあつかう。

[三天打鱼两天晒网] は [三] [两] [打鱼] [晒网] など各項にこの成語がわかるよう表示しておく。

㉔ なお“成語小詞典”にあるくらいの成語はどしどし採用する。

㉕ 事典的説明は、原則として、長くてカード一枚程度とする。もし、どうしても長くなる場合は、

例外として、2枚以上にわたるものをみとめるが、なるべくカード2枚以内におさめる。

(II) 日本語

- ① 日本文は、現代かなづかい及び“内閣告示による送りかなのつけ方”によって書き表すが、当用漢字の方は必ずしも国語審議会の方針に従わない。すなわち、当用漢字以外の字も適宜使用することとし、その水準は大体において高校卒程度の者の漢字知識ないし新聞雑誌の漢字使用の程度を目安とする。たとえば、

傲慢 義侠 馴れる 来賓 螺旋 藪

など、ひどくむずかしいものでなければ使ってよいことにする。

- ②④ 訳文中、日本語の漢字・熟語で、むずかしい字や、当用漢字以外の字

ふりがなをつけるときは小文字ひらがなを用い、左から右へ横書き二段にする。なお、日本固有の読み方はひらがなを用い、外来語はかたかなを用いる。

遊説(ゆうぜい) 麻雀(マーじゃん) 移住(いじゅう) 我(が)

玉(ぎょく) 袍衣(えな) 不俱(ぐ) 戴天 玉石混淆(ごう)

- ③ 日本語の代名詞のうち、漢字で書いてよいもの、ひらがなにすべきものの区別は以下のようである。

漢字でよいもの 彼女 何

ひらがなが本当であるが漢字でもよいもの わたくし(私) きみ(君) かれ(彼)

われ(我) われわれ(我々) ぼく(僕)

必ずひらがなで漢字ではいけないもの だれ(×誰) あなた(×貴女、×貴方)

おれ(×俺)

- ④ 当用漢字補正案のうち、②および③の項の漢字は全部採用する。

親族の称呼について説明する場合は、以下の術語を用いる。ただし、やむをえない場合にかぎり使用することにする。

親族称呼

尊称 卑称 对他尊称 对他卑称

自称 对称(呼びかけ) 他称

学称

なお、これらの術語をほとんど用いずに処理された注釈の1例を次に掲げる。

[姑] gū

①… ②… ③ [~母 mǔ] [~妈 mā] [~娘 niáng] [~姑 gū] 父の姉妹に当たる伯(叔)母: 呼びかけには [~姑!] あるいは姉妹内の長幼の順序を示して [三~] (3番目のおばさん!) のように呼ぶ。 → [小 xi a o 姑娘] [小女儿]

- ③ 用い方により二つの品詞にまたがって使用される語を注釈する場合は、() を用いて一回の注釈ですませるようにする。

[关怀] guānhuái 関心(をもつ)、思いやり(やる)、配慮(する)

[严重] yánzhòng きびしい(しく)、深刻(な。に)

- ④ 解説の問題について

④形容詞の訳語は主として終止形と定めるようにする。黒い、暗い、黒ずんでいる、美しい、きれい、などと訳しておく。従来不用意に訳していた、まっくろな、黒ずんだ、あるいは黒いさま、黒ずんだ様子などの訳語は使わない。15 ページ C) (VI) に見られるように、[黒忽忽の浓云]〔黒拉拉的一片树林子〕など文中に用いられ修飾関係をもってはじめてまっくろな、黒ずんだという訳語をあてはめることができるものである。以後、この点をはっきり意識して注釈するよう努力する。

⑤……のさま、……のようすという言い方は全然用いないわけではない。上例〔滔酒〕の例など、ほかにも文語的な詞にはしばしば用いられる。

〔蔼蔼〕 a i a i ①盛んなさま。②(樹木の) 生い茂るさま。

〔蔼然〕 ā irán ①うるおいのあるさま。②なごやかな (に)

ただし、[黒拉拉] のように黒ずんでいるさまと言わなくても黒ずんでいるというだけでわかるときは、なるべくこの終止形と定める訳語をえらぶようにする。

⑥日本語でする解説には文語脈を用いないことは従来から決められたとおりであるが、とくに……ぬ(理解せぬ、言わぬなど)は用いないで、……ない、……しない、と標準的な言い方を用いて訳すように努める。

⑦普通の解説の文章は大筋として……である、……です(対人関係)……であります(同前の敬語)……した、などを用いる。もとより用例のニュアンスにより……だ、……だった、……であった、……しました、などを随時用いることは言うまでもない。

⑧訳文の時相について

例文のなかで過去にも現在にも訳せるものはなるべく現在形に訳しておく。例文がはっきり過去をあらわしているものは、もとより過去形に訳すが、すべて実情に応じて訳すようにつとめる。訳文は文学的に飛躍したり、意識することをさけ、なるべく逐語訳をほどこし、原文を忠実に訳すよう努力する。詩・詞・尺牘などなるべくそれに似せて、原文の味を生かすよう努力する。

(III) 中国語

①注釈・解説文中に中国語を用いる場合、〔 〕でくくって中国語であることを示す。

例 〔三浣〕の項の解説中に、……、〔上浣〕〔中浣〕〔下浣〕をいう。

②解説文中の中国語はなるべく最初の文字に注音し、すぐ後に()で日本語の簡単な説明を加えておく。

例 〔旗 qí 杆〕(はたざお)や〔旆 liú〕(はたあし)など、……

③引用文・例文の中にむずかしい字音や、特殊な字音があれば、その字のすぐ後に注音しておく。注音は()でかこまない。

例 〔社会各方面对于少 shào 年儿 ér 童的～和教育比以往 w á n g 更为重 zhòng 视〕

(〔关怀〕の項の引例)

(IV) 外国語

①外国語にはなるべく原名つづりを入れておく。日本のかな書きを先にし、原名つづりを後にする。その場合、固有名詞は大文字で始め、おの第二字目以下は小文字とし、また普通名詞は全

部小文字を用いる。すべて（ ）でかこまない。

【伊朗】yī lǎ ng イラン Iran.

【底片】dǐ piàn 写真の原板。ネガ(ネガチブ) negative.

②外国語を入れたときの注釈の仕方

①外国名の後に日本語の他の訳語を続けて書くときは間を . で区切る。

モノタイプ monotype. 自動植字機.

②日本語の訳語が説明的な訳語であるときは（ ）に入れる。

モノタイプ monotype. (自動鑄造組版機)


③同一語義の外国語が二つ以上あってそれを示すときは間を , で区切って並べる。

組穿孔機. 連成穿孔機. gang drill , drilling machine

④すべて外国語が最後にきたときはピリオドは打たない。

(V) 学名

①動物・植物名は誤解をさけるため、たしかなよりどころを持つものだけ選んで学名を入れる。

【石竹】shízhú 〔〕せきちく. からなでしこ Dianthus chinensisL.

②【石竹】は“辞海”958頁にあり、“日本植物図鑑”583頁、“広州植物志”129頁にすべて同じ学名を入れているため、たしかなものとみて学名を入れる。

なお、中国名および学名だけわかっていて、日本名のないもの(見当たらないもの)には、ひとまず学名だけを入れたカードを取っておく。

【玉簪花】yùzānhuā 〔〕Polianthes tuberosa L.

②化学記号などの記号の取り扱いは下例のようにする。

バリウム (Ba, 化学元素名)

(VI) 数字

アラビア数字を用いる。ただし万以上の単位には万・億・兆などの漢字を用いる。なお、熟語中の数字は漢字を用いる。

6 億 3,000 万人	1 個	3 か月
三日月	四天王	七類八倒

(VII) 同義語・類似語

①同義語・類似語は代表的な語に集中して注釈を詳しく施し、それ以外の語は代表的な語のところへ導いておく。

②名詞以外ではその代表的な詞の選定は慎重にすること。

②同義・類似語として集められた語が排列するとすぐ連続して並ぶ場合でもそれぞれカードを作っておくが、その場合、集中されるカードには ⇒ を用いず、同上、あるいは同下、の符号を用いて次のように示しておく。

【三鞭酒】sānbīānjiǔ = 【三宾酒】シャンペン酒.

【三宾酒】sānbīnjiǔ 同上.

③一つの見出語に集められる語が多いとき、その語と同じ語で始まらない語群は下記のようにして重複を避ける。

例 [維生素] wéishēngsù の場合、

㉑ 注釈中に書きこむ場合、

①…… [維生素 B₂] → [核 hé 黄素] [維生素 B₆] [盐 yán 酸吡多醇] ビタミン B₆
[……] ……

㉒…… [維生素] ビタミン B₂ → [核 hé 黄素] [維生素 B₆] [盐 yán 酸吡多醇]
ビタミン B₆ [……] ……

㉓ カードの下方に参照事項として書く場合、

ビタミン B₂ → [核 hé 黄素] ビタミン H → [促 cù 生素]

㉔ 以上のように二つ以上並列するときは間を1字分あけて次のを書く。

(Ⅷ) 段落

①訳語と次の用例の間は1字分あける。

②訳語中の①と②の間や、㉑と㉒の間などは1字分あける。

③用例の訳の最後と次の用例の初めとの間は1字分あける。

(Ⅸ) 並列

① [] でくくった語を並列する場合は、並列符号 ・ は用いない。すなわち、

[○○]・[○○]・[○○] あるいは [○○・○○・○○] などとはしない。

[票据] piàojù ① [汇 huì 票] [期 qī 票] [本 běn 票] [庄 zhuāng 票] [支 zhī 票] など
手形・小切手類をいう、……、②……

②注釈の中でいくつかのものを並列して説明する場合、簡単なものは並列にしてもよい。

[三大文献] sāndàwénxiàn 1949年、中国人民政治協商会議が採択した三つの重要な法案、
[人 rén 民政協共同綱領] [人民政协组织法] および [人民政府组织法] をいう。

㉔㉑ 中国人民政治協商会議は中国語と日本語訳名が同じである。この場合には、注釈の都合で日本語として取り扱っても、中国語として [] に入れて取り扱ってもよい。

㉕ 上例のような場合、……重要な法案、で切って、以下の三つの言葉を → [] [] []
としてもよい。ただし、→ [○○・○○・○○] としない。

(Ⅹ) 姓・複姓。

用語を姓、と複姓、の二つにする。

[祁] qí ① [盛] 盛大なようす。②姓。

[诸葛] zhūgé 複姓。

㉔ “国語辞典”、“同音字典”にのせられている姓・複姓は一律に全部採用しておき除去しない。

(Ⅺ) 人名用字。

姓に対して常用度の低い字で、もっぱら人名に使われるものを示す用語として人名用字を設ける。

〔●・高〕 xié 人名用字。

〔瑾〕 guàn 一種の玉（●）で、人名用字。

(XII) 地名用字。

〔墟〕〔仑〕〔城〕〔堡〕〔堡〕などのように、とくに地名に用いられる字に対し、地名用字という用語を使って説明する。なおこれには必ず用例を加える。

例㉑ 〔堡〕 bǎo pù

A) bǎo ①……, ②……,

B) pù 地名用字。〔奥 ào 伦～〕オレンブルグ。〔吴 wú～〕陕西省北部の小都市。

例㉒ 〔紇・紇〕 gé hé

A) gé ……

B) hé ①人名用字。…… ②地名用字。

同一字で人名にも地名にも使われる字は人名用字、地名用字とわけてそれぞれ書く。

(XIII) 訳音字。

〔巴〕〔阿〕〔马〕〔亚〕〔奥〕〔烏〕〔恩〕などのように訳音字としてよく用いられる字を注釈するためには、訳音字の符号を用い、その後に必ず用例を掲げておく。訳音字の範囲は“同音字典”に準拠するが、実情に応じてふやすことにする。

〔恩〕 ēn

①…… ②…… ⑤訳音字。〔～格 gé 斯〕エンゲルス。

ただし、〔咖啡〕の〔咖〕のように、もっぱら“コーヒー”の訳音字として用いられ、ほかに用例が見当たらないような場合は、訳音字として取り扱わず、17ページD) (I) ①に準じて処理する。

E) 符号について

(I) . 黒点

①見出語の注釈が幾とおりもあるときは、そのおのおのを . で区切っておく。

長びく. のばす. 遅らせる.

②注釈および付帯的説明の最後に用いる。

… 大声でわめきたてる.

③引用例文中の . (中白点) は、. に変えて引用する。

④次の場合には . を打たない。

⑤見出語や注釈中の語・成語例文などの後には打たない。すなわち、〔 〕の右下の内にも外にも打たない。

〔点脚儿〕 〔吊桥〕 〔走投无路〕.

〔天又索索地下起冻雨来了。← 这是打不来的。↘

(ただし、〔有钱没有?〕など疑問文・感嘆文にはそれぞれ ? ! をつける)

⑥同義・同類語を並べた後にはうたない。

- [再加工]の項で = [又搭着]. ← これは打たない.
 ③ () が文末にきた場合は打たない. ← きゃら (香の名).
 きびしい (しく). 深刻 (な. に).
 ↑ この場合の黒点は前の訳語と後の訳語を区別するために入れる.

- ④ 日本文の () 内の文末の黒点はつけない.
 ⑤ ・ を真中の高さに打つ場合は次の二通りである.
 ㉓ 軽声音節の注音つづりの前に用いる.
 [孩子] hái · zi [翻译] fāng · yì
 ㉔ 日本語の名詞・代名詞を並列する場合に用いる.
 中国の地名・人名の書き方. 疑問・質問の内容.

(II) , コンマ

- ① 日本文による注釈・例文中に、くぎり符号“、”の代りに用いる。
 中国の場合は、一般に……
 ② 見出語に二つ以上の発音がある場合、その各注音つづりの間に用いる。
 [剥削] bāoxiāo, [剥削] bōxuē
 なお次のコロロン符号の注を参照のこと。
 ③ 実際上、で区切って用いられることばを見出語とするときはありのままの形で採る。
 [只许州官放火, 不许百姓点灯]
 次の例のように成語・熟語辞典などで変則的な標点を施してあることばは実用面のありのままの形に引き直して採用する。
 × [神不知, 鬼不觉] 不採用
 ○ [神不知鬼不觉] 採用

(III) : コロン

- ① “すなわち”の意味をあらわしたり、あるいは総括的説明を加えたりするのに用いる。
 ② 外国語の原音つづりをつける場合は () に入れないでそのまま続けて書く。
 オイペン Eupen : ベルギー・ドイツ国境地方、現在はベルギー領。
 ユーラシア Eurasia 大陸 : ヨーロッパ大陸と……
 ㉓ , : 符号の使い分けは、説明文が長い場合は : を用い、短かい場合は , を用いることとし、次のように処理する。
 例④ [欧拉] ōula
 ㉔ オイラー-L. Euler, 1707~83, 数学者。
 ㉕ オイラー-L. Euler, 1707~83 : スイスの数学者・物理学者で変文法の創始者。……
 例⑤ [欧(姆)] ōu(mu)
 ㉔ オーム ohm, 電気抵抗の単位。
 ㉕ オーム ohm : 電気抵抗の単位, 1 ボルトの電位差……
 ㉖ オーム ohm, 電気抵抗の単位 : 1 ボルトの電位差により……

(IV) - ハイフン

① [言差语错] yánchā - yǔcuò

② [椅] yǐ ① [-子] いす。

[刀] dāo [-儿, -子] [圖把 bǎ, 口 kǒu] 刀. ナイフ. 刃物。

③ [- 不了] [- 得了] など、前の一字を省略する場合は、[-] (短い横棒) を用い、……や。などは用いない。

(V) ? 疑問符 ! 感嘆符

原則として日本語の訳文中には用いない。ただし、疑問符は肯定文問いかけの場合は用いる。
行くでしょう？

(VI) 標点符号

例文引用の場合、例文につけられた符号は原文のまま引用する。ただし、引用符はすべて“ ”を用い、原文に「 」を用いてある場合も“ ”になおして採録する。

[他哭着着脸说：“妈呀！这——我这毛病，呃，近来越发凶了！”]

[寄款人的姓名、住址] 送金人の氏名・住所。

④上例のように、中国語の、 は日本語の訳文では・にする。23 ページ E) (I) ⑤⑥参照。

(VII) () 括弧

①見出語の中で省略できる字は () でかこむ。

[药房 (子)] yàofāng(・zi)

②引用例文中に言いかえのできる字句がある場合、その後に言いかえの字句を () にかこんで示す。

[行是行, 可 (可是) 不大合式]

④見出語にはこの方法は用いない。すなわち [三大紀 (規) 律] は誤り、二枚のカードに分ける。なおこの符号については 14 ページ (III) を参照のこと。

③注釈中に用い、(または、あるいは) の意味に用いる。

きれいに (すっかり) 取られる。きびしい (しく)、深刻 (な. に)

④注釈中に付帯的説明を加える場合は、その部分を () でかこんで区別する。

例 [妻子女] の注釈の後で、([儿] は男の子、[女] は女の子を指す)

[定额] dìng' é 定められた金額・人員 (→ [定員] [名額])・物の数量 (→ [定量])

……

⑤用例に用典を表示する場合は用典名を () でかこむ。

用典をあげる場合は、その篇名・回数 (章数) など () でかこんで明示する。

[乱子] の例文で、

[这样的作法, 没有不出~的] (毛・矛 3)

⑥元曲選などで用例の出典がどこから出たかわからないものは、やむなくその用例を除く。

見出語があっても用例がなければわからないようなものは、これもやむなく見出語ごと全部のぞく。

はっきり意味のつかめない例は放置しないで処分する。

用例がわからなくても、見出語の解釈だけでも意味が通ずる場合は、古白として残しておく。

〔赤紫的〕chì zǐ de 古白 まったく、本当に。

⑥ふりがなに用いる。

例 振付（ふりつけ） 腐食（ふしょく）

⑦訳文中の中国語に簡単な説明をつける場合に用いる。

例 〔得 dǎi〕は〔逮 dǎi〕（捕らえる）に通じて用いられる。

(Ⅷ) ～ 省略符号

①見出字あるいは見出語を例文中に用いる場合。

例 〔责成〕の項の例文で、〔～在我〕とするなど。

②例文中にその見出語の反復形があるときは次のように処理する。

見出字〔看〕の例文中に〔……看看……〕があるとき 〔……～～……〕

〃 〔……看一看……〕 〃 〔……～一～……〕

見出語〔打听〕の例文で〔拜托您给打听打听〕とある場合〔拜托您给～～〕

③見出語が2字以上の場合でも1個の～であらわす。

④誤解を生ずるおそれのあるときは、この省略符号を用いなくて、実字をあてる。

例 〔吃饭〕の例文で〔～了～了〕とせずに〔吃了饭了〕とするなど。

⑤同義・類似語のある場合の省略符号は、その見出語と同義・類似語が例文中で完全に代替できる場合にもみ用い、そのうちの1語だけがその例文中に用いられる場合は実字をあてる。

〔轮班〕lún bān = 〔轮流着〕〔替 ti 换着〕……〔轮班看守〕……, [……]

〔取钱〕qǔ qián = 〔取款〕〔拿 ná 钱〕〔提 ti 存〕……〔拿支票～〕……, [……]

⑥見出語に注音するさいに、省略できる字が連続している場合は、字数に関係なく～の符号ひとつずつすませる。ただし、間に省略できない字があるときはひとつひとつ書く。

〔白云观〕báiyúnguān, ㄅㄛ～

〔百战百胜〕bǎi zhàn bǎi shèng, ㄅㄛ～ bǎo～

なお、7ページA) (I) ③を参照のこと。

(Ⅸ) []

見出字・見出語や例文・注釈中の中国語の語・成語には、すべて[]を用いて、中国語であることを示す。なお、これに付随する記号、A) B) (I) (II) ①② ㉓㉔なども便宜的に[]に入れることにする。

例 〔阖・闾〕hé = 〔合 hé A) (II)〕……

〔份〕fèn ⇒ 〔分 fēn B) ②〕

〔乾〕qián ……→ 〔干 gān A) (II)〕

(X) ⇒ イコール矢印

その項に説明があることを示す。同義・類似語群中、代表的な語のところに集中して注釈をくわしくほどこし、それ以外の語は ⇒ を用いて解説のある場所を示す。

例〔七夕〕にくわしく注釈しておき、〔巧节〕〔七巧〕〔七月七〕の各項には、
〔巧节〕 qǐ à ojié ⇒ 〔七qī夕〕

(XI) → 参照符号

①その項をも参照してもらいたいことを示す。関連のあることばにはすべてこの符号を用いる。

②関連事項や派生事項の語を一か所にまとめて説明する方が都合がよい場合は、まとめられた語のカードは、まとめられた語のカードへ → で導いておく。この場合は同義・類義語でないので ⇒ は用いない。

〔案奉〕 ànfèng …… 〔案准〕 …… 〔案据〕 ……

〔案据〕 ànjù → 〔案奉〕

〔案准〕 ànzhǔn → 〔案奉〕

(XII) = 等符号

前項と後項が等しいことを示す。

〔七夕〕 qīxī = 〔七月七〕〔巧 qǐ à o 节〕〔七巧〕 ……

〔竟〕 jìng ① …… ② = 〔到 dào 底〕 …… ③ ……

(XIII) ↔ 対立符

対立語（反対語・対象語）を示す。

〔高〕 gāo …… ↔ 〔矮 ài〕〔低 dī〕

〔福〕 fú …… ↔ 〔祸 huò〕

(XIV) _____ アンダーライン

①習慣上、特別に発音される見出語の場合、その特殊な音の下に線を引いておく。

〔天台〕 tiāntāi

〔曲沃〕 qūwò

②地名などの特殊な発音でも“同音字典”に記載されている場合は_____を引かない。

③㊦㊦などの表示がある場合は特殊な字音であっても下に横線を引かない。

〔咧咧〕 lié · lie ㊦ ……

〔萑萑〕 bìlì , ㊦ biē · la

これらの例のように、lié, biē · la などと下に横線を引かない。

④次のような特殊な場合には _____ を用いる。

①3声が連続し、2字目が軽声となる場合のうち、特殊な場合。

正常な例 〔把柄〕 bǎ · bīng

〔把〕が2声に変り、〔柄〕が軽声の場合、このときは_____は必要でない。

特殊な例 〔撇耻〕 piěchǐ

〔撇〕を3声の原音のまま読ませ、〔耻〕を軽く読ませたい場合はこのこのように注音する。もし上例と同じように piěch i と注音すると、piě を2声に変えて読まれてしまうので piě・chi とする。すなわち piě・chi として下に線を引くのは発音上の誤解をさけるためである。

⑥〔四适〕sì・dì

この場合、〔适〕はほかに dì と発音される例が見あたらず、その上、この例でも轻声であるため、その元来の声調を知ることができない。そのため、あたかも特殊轻声字と同じような注音をするよりほかに方法がないので誤解を生じないように____を用いておく。

④引用例文中にこの符号を用いてある場合はそのまま採録する。

(XV) …… (点6コ)

①動詞・助動詞・介詞など、注釈にあたって、他の語と関連させなくては注釈しにくいものは、関連語のかわりに、……を用いて注釈し、その後で用例をつける。

例〔不是……就是……〕の項で、……でなければ……である。……か……である。

②引用例文が長くて中略する場合にも用いる。

F) 略号

(I) 同前。同上。同下。

注釈中、同一カード内のすぐ前の注釈と同一であるときは 同前。とする。見出語がすぐ前の見出語と同義であるときは 同上。とし、すぐ後と同義のときは 同下。とする。後に . を打つ。
例.〔钢・鋼〕gāng はがね。钢铁。〔极ji软~〕含有炭素分0.25%以下の钢铁。

〔软 ru à n~〕同前0.25~0.5%のもの。

上例のように 同前の…… という言い方を用いてもよい。

③ 同上② のような取り扱いをした場合、②のあとに . は打たない。

(II) 発音上の略号

①☒

見出字に読音がある場合には、その綴りの前に☒の符号をつける。またその読音はその文字のすべての用法にわたるものであると否にかかわらず、各表音綴りの間はあけておく。また、注釈は各音別にほどこす。

例① 〔车・車〕chē ☒jū

……

例② 〔臂〕bèi ☒bì

A) bèi ①うで。〔胳膊gē~〕同前。②腕で……する。〔~助〕助ける。

B) bì bèi の文語音。〔~膊〕うで。〔膀 táng~当车jū〕……。

例③ 〔玩(斝)〕wán ☒wàn

A) wán ①…… ②…… ③…… ④…… ⑤……

B) wàn wán②④⑤の文語音。

〔玩(骰)〕 wán ⇒ wán

㊦の符号のふくむ範囲について

〔革〕 gé ㊦jí

A) gé ①…… ㊦②…… ③……

B) jí ㊦急なり. [病~] ……

これは〔车〕における chē ㊦jū の関係のように、chē の全体の文語音として jū があるものと性質がちがう。しかし jí と読んだ場合は、とくに別の文語的な意味を持つので同じように㊦の略号を用いて処理する。

- ㊦見出字の用例はなるべくその発音が口語音が文語音かにはっきり割りきれられるものを選び、両方に読めるか（あるいは文語音が強い）ようなものは、なるべく見出語の方へまわす。この方法を用いてもどうしても問題だと思われるものは個別的に検討する。

② ㊦又音

- ㊦又音が正音の見出字の全部の意味の又音である場合は、見出字の注音綴りを離さずに書く。注釈は別にしないで下例のように取り扱う。

〔淋〕 lín ㊦lún lìn lìn

A) lín ㊦lún lìn ①……

……

B) lìn ……

- ㊦又音が正音の見出字の意味の一部分の用法である場合は、見出字の注音綴りの前に ㊦又音の符号はつけず、注釈のその部分に又音であることを示す。

〔色〕 sè sh à i

A) sè ① ㊦sh à i …… ②……

B) sh à i ⇒ sè①

- ③方言は次の略号によって分類する。

㊦ 地域不確定のもの

㊦ 北京方言

㊦ 東北 東北地方方言

㊦ 上海方言

㊦ 北方 華北地方方言

㊦ 蘇州方言

㊦ 西南 西南地方方言

㊦ 吳方言

㊦ 西北 西北地方方言

㊦ 福建方言

㊦ 南方 江蘇・浙江・安徽を包括した地方の方言

㊦ 広東方言

〔飞轮〕 fēilún = [㊦ 甩 shu à i 轮] [㊦ 发 fā 势盘] ……

〔正经〕 zhèng · jīng , ㊦ ~ j īng

〔糊涂〕 hú · tú , ㊦ ~ · du

- ㊦ “国語辞典”などに呉語とあるものはそのまま㊦として採用する。四川方言など比較的狭い

範囲にわたるものは略号を使わず、従来きめられたとおり具体的に四川方言などと書く。なお、㊦の略号は㊦および㊦とそれぞれ重複するが、その場合に応じて適当に選

折して使いわける。

④㉔

擬態詞・擬声詞に用いる。なお声調の固定しているものだけ声調符号をつけ、固定していないものにはつけない。

(III) 言い方についての略号

①㉕

標準的な言い方や学名などの正式の言い方に対する俗称、あるいは訛音にはこの略号を用いる。

〔电阻〕diànzǔ = ㉕〔电阻力〕……。

〔鼻孔〕bíkǒng = ㉕〔鼻子眼儿〕……。

〔葦築〕bìlǚ , ㉕bié・la

②㉖ ㉗ ㉘

成語の略号に㉖を、ことわざの略号に㉗を、しゃれことばの略号に㉘を用いる。

例 〔沧海桑田〕sānghǎi sāngtián ㉖……

〔班门弄斧〕bānmén nòngfǔ ㉖〔名人魯班の前で腕をふるい、自分の技量をわきまえない；盲へびにおじず、釈迦に説法。〕

上例のようにまず㉖などの略号をおき、次に原義成立の意味を先に書き、:を置いて原義に相当する日本語の語句・ことわざなどを後に書く。

③㉙ ㉚

元来の意義から転用されることを示す略号に㉙を、比喩的に用いられることを示す略号として㉚を用いる。

例 〔抱佛脚〕bàofójiǎo ㉙ 仏の足にすがりつく。㉚苦しいときの神頼み。

原義を先に説明し、㉚あるいは㉙としたあとに転じた意味あるいは比喩的に用いられた意味を書く。なお原義を示しにくいような場合には、冒頭に㉚あるいは㉙を置いて直ちに転じた意味あるいは比喩的に用いられた意味を書いてよい。

㉙㉚㉗㉘㉙㉚㉗㉘などの略号は他の略号と使用法は同じである。すなわち、いずれも必要と思われる場合にだけ付ける。㉖の略号についても、これを特別視しないで、必要と思われる場合には使用する。たとえば〔千慮一失〕〔心满意足〕などには㉖の略号は付けなくてもよい。〔下马威〕には付けた方がよいと思われる。

④㉛を量詞の略号とする。

例 〔挂・掛〕guà ①…… ㉛車輛とか火花・ぶどうなどひっかけるもの・つり下がったものを数えるのに用いる。〔一〜大車〕1台の大八車。〔一〜葡萄〕ひとふさのぶどう。ただし、この略号を使用しないで済ませることもある。

例 〔張・張〕zhāng ①…… ㉛皮・紙などを数える量詞。〔一〜紙〕1枚の紙。

また、量詞としていろいろなものを数えるのに用い、ひとくちに説明しにくいものは、説明を施さずに、㉛〔一〜事〕ひとつの事〔用事〕。〔一〜衣裳〕1枚の着物。とする。すなわち㉛としていきなり具体的な用例をならべ、説明して代える。

例 〔房〕fáng ①<所, 座, 幢>家. 住家. 家屋. 〔〜子〕同前。

なお、名詞につく量詞の書き表し方は、それぞれの注釈の前に小文字で〔 〕に入れておく。たとえば

- ㉔ [鳥・鳥] niǎo [- 儿] <只>鳥. [小~] 小鸟.
- ㉕ [书・書] shū <本, 套, 册, 部>書物.
- ㉖ [刀] dāo [- 儿, - 子] <把, 口>刃物類の総称. [小~] 小刀. [菜~] (料理用の) 包丁.
- ㉗ [肉] ròu 肉. [一块~] ひとかたまりの肉. [一斤~] 1斤の肉.
- ㉘ [蚂蚁] mǎ yǐ <只>㉘あり.

上記、㉔の例のように量詞は鳥(注釈)の前に表示する。すなわち[鳥]には[儿]字がつくので、それを先に掲げ、そのあとすぐ続けて量詞の<只>を置く。この[- 儿]のカッコ及び文字と同じ大きさで量詞の<只>は表示される。

㉕はいくつも量詞をとる場合で、同じカッコの中に使われる量詞を並べて書き、間を、で区切る。そしてこの個々の量詞の使われ方については、いちいちこまかく説明しない。それは[本 bēn] [册 cè] など各項に行って詳しいことを知ってもらう方針をとる。

㉖は注釈のあとに用例のある場合で、[小~] [菜~] など量詞には関係しない用例ばかりをあげ、[一把小刀] [一口刀]などは例としてとりあげない。

すなわち、[把 bǎ] [口 kǒu] の使われかたについては、同じくそれぞれの項を見もらう。

㉗は[块] [斤] がとくに[肉]の量詞として特有のものではない。しかしこのようにごく普通によく使われているものは、さりげなく用例として掲げておく。

㉘は見出字でなく見出語の場合で、同じ注釈の前に量詞を置く。

⑤ ㉘

人名の略号として使用することになっていたが変更し、大辞典本文には採用しない。

人名辞典の採録範囲について

- ㉙ 人名は実在の人物だけを対象とする。
- ㉚ 架空の人物・小説中の人物、またジョージ・アンナなどのクリスチャン・ネームは入れない(ただし、ノアの方舟など事典的なものは本文中に出ることがある。)
- ㉛ 外国人名は各国の元首などおもだったものはのせる。
- ㉜ 歴史上有名な科学者・文学者などはのせる。
- ㉝ 現在の政治・経済・文化関係の有名な人物はのせる。
- ㉞ その他はまたのちに検討する。

⑥ ㉞

地学・地理の略号として使用する。なお地名は別に地名辞典を作り、そこで解説される。

大辞典本文の中へ地名が出てくる場合の処置については

- ㉟ 見出字でしかもその1字だけで地名を表すもの。

例 [沪・滬] hù 上海の別名。

㊱の略号は用いないで、簡単な説明を施す。

㉔ 見出字で他の字と複合して地名に用いられるもの。

例 [角(角)] …… A) …… B) …… C) lù [角] ①地名用字。〔～直鎮〕江蘇省南部呉興県に属する。②人名用字。〔～里〕 ……

㉕ 見出字でほかの意味と関連して出てくるもの。

例 [河口] hékǒu ①河口(かこう) ②雲南省南部の県名。

上例のように、河口のいみと関連して地名が出てくるものは、同じく[國]の記号を用いないで、簡単な説明を施して処理する。

なお、これらの地名は県以下の単位のごく小さいものは地名辞典にのせなくてよい。すなわち、小さい地名は本文中に例として出すだけで、地名辞典には必ずしもせなくてよい。

[沪] [河口] などとはもとより地名辞典にも採録され、重複するわけである。ただし、本文中の地名と地名辞典に出る地名は互いに関連させなくてよい。上例の㉔㉕に示したように、ただ地理・地学のいみの略号としては依然として使われる。

㉖ 地名辞典の採録範囲について

㉖ ①日本の地名はのせない。

㉖ ②朝鮮の地名は〔漢城〕などおもだつたものをのせる。

㉖ ③外国の地名はできるだけわしくのせる。とくにアフリカ・東南アジアなどの地名は極力のせる。

㉖ ④国名・首都名はのせる（できれば国名・首都名一覧表を作る）

㉖ ⑤中国地名は現在の中国の行政区画表に基づく県以上の単位、すなわち県名・専区名・市名・省名などをのせる。

㉖ ⑥中国の古地名は“国語辞典”などにあるものを選択して採用するだけで、とくにあらたに探し出してのせることはしない。

㉖ ⑦中国地名のうち、歴史上有名な地名や県より小さいところでも現在とくに重要になったところは採用する。

㉗ [音訳]

音訳語にこの略号を用いる。

例 [配司登令] pèisīdēng lìng [音訳] ピストンリング piston ring

[买办] mǎi àn = [音訳] 康 kāng 白渡 [音訳] 刚 gāng 白渡 ……

上例のように [音訳] の符号をいちいち一語ずつつける。

ただし、略号でわかりにくいと思われるときは、音訳語としてことばを費やして説明する。

㉘ [音義訳]

音義訳語にこの略号を用いる。

[拖拉机] tuōlājī [音義訳] トラクター tractor

ただし略号でわかりにくいと思われるときは、音義訳語としてことばを費やして説明する。

㉙ 時代区分をあらわす略号は使用せず、用語は適当に考え、以下のようにあらわすこととする。

古代（唐以前、殷・周時代までを漠然という）

昔時（宋・元・明・清初を指し、ときに古代をもふくめる）

旧時（清末より民国時代を指す。清末・民国時代という言い方も時に応じて用いる）
現在（人民共和国成立後と言ってもよるしい。なお解放後という言い方はさしさわりが生ずるので用いない）

例 〔大辟〕 dàbì ㊦ 古代の死刑。

ただし、朝代のはっきりしている各時代の制度・官職・習慣・事件などを注釈するときには、それぞれ冒頭に ㊦ ㊧ ㊨ ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ などの略号を用いる。

㊿① 歴代の制度・官職名の処理について

㊿㊿ 古典やその他白話文献を読むために必要と思われる制度・官職などは相当程度採用する。〔尚书省〕〔吏部〕〔刑部〕〔翰林院〕〔巡撫〕〔按察使〕〔都統〕などは採用する。

㊿㊿ “国語辞典”の切りはりなどで現存するカードをなるべく捨てずに採用する方針をとる。

㊿㊿ はっきり注釈の施せるもの、簡単に説明できるものは全部とり入れる。

㊿㊿ 注釈の不可能なものは採用しない（たとえば清朝の官制・軍制などで、ごくさいなもの、不明確なものはとり入れない）

㊿② 書名・書楼名の採録範囲について

㊿㊿ 古典（いわゆる漢文）に属する書名は、そのうちごくおもだったものを採用する。

〔论语〕〔说文〕〔四书五经〕〔四库全书〕〔十三经〕〔诸子百家〕などは採用するが、大学・儀礼・通雅などは個個にとりだして解説はしない。

しかし、〔十三经〕あるいは〔诸子百家〕の項で事典的説明を施すとき、それに関連して出てくる。

㊿㊿ 歴代の白話文献は極力採り上げて解説する。すなわち唐・宋・元から清朝までの白話小説などは大部分採り上げて解説する。

㊿㊿ 現代の作品はどれを採用するか決定しにくいので、いちいち相談の上、有名で必要と思われるものは採用する（付録の語彙蒐集のために作成したリストを参考にしてとりきめる）

㊿㊿ 書楼名は有名なものだけ採用する。〔汲古閣〕〔文苑閣〕〔守山閣〕など。

以上はだいたいの目安であって問題がでたときにはそのつど相談し決定する。

㊿⑩ 古白

古白話を注釈する場合、例文を示さない場合には、注釈の冒頭にこの略号を用いておく。

(IV) その他の略号

書	書名	哲	哲学	仏	仏教	史	歴史	山	山岳
河	河川	軍	軍事	法	法律	経	経済	数	数学・算法
理	理科	化	化学・化合物	天	天文・気象	鉱	鉱物・鉱山		
植	植物	動	動物	虫	虫類	魚	魚貝類	鳥	鳥類
医	医学	中	中医 漢方医学	生	生理 生理学	薬	薬学・薬物・薬草		
工	工学	土	土木	建	建築	機	機械	電	電気
紡	紡績	織	織物	染	染色	色	色名	度	度量衡

農 農業 商 商業 美 美術 音 音楽 劇 演劇
 又 スポーツ 彫 彫刻 旧 旧書翰文語用 梵 梵語
 公 旧公文用語 罵 罵語 挨 挨拶語 謙 謙語 敬 敬語

(V) 略号の位置について

- ①略号の位置は、発音に関するものは注音つづりの前に、意味に関するものは注釈の前に置く。
 ②略号の使用が複雑になるときは、文章で（ ）に入れて説明する。
 ③略号のうち、**滬** **滬** **滬** などは日本の当用漢字に含まれていないむずかしい字であるが、ほかに適当な略号がなく、また出版の際は凡例に解説を入れることでもあり、現行のまま今後も使用してゆく。

(VI) 略号使用例(補遺)

〔发散〕 fāsàn, **散** fá·sàn 散らす。

〔咧咧〕 lié·lie **咧**……。

- 〔一眼〕 yīyǎn ①ひとめ。②=〔**滬**一点儿〕**滬**すこし。
 〔一眼〕 yīyǎn ①ひとめ。②**滬**すこし(北京語の〔一点儿〕にあたる)
 〔碰头〕 pèngtóu =〔**滬**碰見〕**滬**·西北 出会う。
 〔碰头〕 pèngtóu **滬**·西北 出会う。(北京語の〔碰見〕にあたる)
 〔揶克〕 pōukè **揶**苛酷(●)に税金をとりたてる。

④略号が二つならぶ場合の順序。

- ①**機** **南**方 これは機械の**機**を先にし、方言略号はそのあとにならべる。この場合**機**と**南**方は別々の四角に入れる。
 ②**明**·**滬** **滬**·**南**方 同じ次元のことが二つ並ぶ場合、同一の四角の中に入れ、間を・で区切る。

G) 文字について(雑)

①まぎらわしい偏旁

尪 犛 鸟 鱼

②まぎらわしい字体

〔纏〕の字はテンのない〔纏〕の字も散見するが、テンのある〔纏〕と書く。

〔真〕には〔眞〕〔真〕二通りの書きかたがあり、中国側ではべつにどちらが正しいとも言っていない。しかし〔真〕がより多く用いられる趨勢にあるので、〔真〕をひとまず採用しておく。〔眞〕はあやまりである。

③漢字簡化第二表と第四批簡体字の異なる点

喽 (〔姿〕にふくまれていたが、口へんをつけて独立する。)

澈 (〔彻〕にふくまれていたが、独立して繁体字のまま使用される。すなわち〔彻〕は〔徹〕だけの簡体字となる。)

艙 (〔倉〕にふくまれていたが、独立して繁体字のまま使用される。すなわち〔倉〕は〔倉〕

だけの簡体字となる.)

鐘 (〔钟〕の繁体字として新しく追加される. すなわち〔钟〕は〔鐘〕〔鍾〕2個の繁体字をもつことになる.)

④中国の簡体字と日本の略号のうち、まぎらわしい字

中国 亚 恶 压 围 荣 营 盐 应 假 经 茎 惠 县 俭

日本 亜 悪 圧 囲 栄 営 塩 応 仮 経 茎 恵 県 儉

中国 斋 册 残 戈 实 释 处 称 图 醉 齐 迹 摄

日本 齋 冊 殘 戈 實 釋 處 稱 圖 醉 齊 跡 攝

中国 争 续 单 团 传 专 东 德 式 恼 卖 冰 佛 变 与 两 猎

日本 争 続 単 団 伝 専 東 徳 式 悩 売 氷 仏 変 与 両 獵

H) 文法用語

文法用語は以下の述語を使用する.

(I) 品詞

名詞 固有名詞. 普通名詞 (一般名詞). 抽象名詞.
数量詞 (数詞-基数, 序数, 倍数, 分数, 概数)
(量詞-名量詞, 動量詞)

時地詞 (時間詞, 場所詞, 定位詞)

代名詞 (人称代名詞, 指示代名詞, 疑問代名詞)

動詞 (自動詞, 他動詞)

形容詞 (性質をあらわす, 程度~, 状態~)

繫動詞 (準繫動詞)

助動詞 (前置助動詞, 後置助動詞)

介詞

副詞 (前置副詞, 後置副詞)

接続詞 (順接, 反接)

助詞 (語気詞をふくむ)

擬態詞

擬声詞

接頭字

接尾字

感投詞

(II) 文の分類

構造からの分類

単文

複文 - 連動式, 通繫式, 複合式.

- 〔 主語述語文 — 名詞述語文 (判断文)、形容詞述語文 (描写文)、動詞述語文 (叙述文)、
無主語文
- 〔 完全文
- 〔 省略文
- 〔 正常文
- 〔 倒置文
- 用途による分類
 - 平叙文
 - 疑問文 (反語文をふくむ) — 特定疑問文、諾否～、選択～、反復～、間接～、語気～、
命令文
 - 感嘆文
- その他、特に注意される用語
 - 主語 述語 賓語 補語 詞 (単語・述語) 単音詞
 - 多音詞 態 (aspect) 軽声 軽読する 重念 重読する
 - 自動文 使動文 被動文 () 内の用語は使用しない。

- ㊦㊧ 文法用語の説明は、辞典本文のなかにはほどこさない。巻末に簡略な文法表をのせ、それで補うこととする。なお辞典本文の中での各字についての文法的説明は、従来きめられている文法用語を使用して説明する。
- ㊨ 見出字・見出語の解説にはなるべく文法用語を用いなくて処理するようにつとめる。
(すなわち、実例を豊富にあげて説明に代える方向をとるわけである)
しかし、文法用語を使って説明する方がよくわかる場合はもちろん使用してさしつかえない。
(文法用語は前頁に掲げてあるものを用いる)

付録

(I) カード整理上の諸注意

- ① 取捨の目印 “漢語詞典” および “同音字典” のすべての語・用例に対しては、採用・不採用の印を○×を用いて、もれなくつけておく。
鐘ヶ江中国語辞典、香坂・太田現代中日辞典は、“国語辞典”・“同音字典” なみに取り扱い、必ず参照・検討する。各整理者がある字について、見出語まで整理が終わったあと、すぐに前述の辞典のその字の項を見て、当方ないもの、あやまりなどを対照するようにする。なお採用にあたっては十分吟味を行うことはもちろんであるが、採否のしるし ○ × をつけるかどうかは各自の気持ちにより、随意にしてよい (“同音字典”・“漢語詞典” には全員が○ × をつけなければならない)
- ② 挿図について 図を入れると一見して実体がわかるような場合にはなるべく図を入れるようにする。カードには略図またはそれに適当な図のある場所を書き込んでおく。
- ③ カード整理にあたって = ⇒ → は煩をいとわずそのつどいちいちあたってたしかめていただく。なおたしかめたものには鉛筆でチェックしておいていただく。

- ④カードのうち2枚3枚にわたって長い説明を加えたものがあるが、なるべく1枚にまとめて書くよう努力する。
- ⑤1字アケの励行 カード記載上、注釈のあと例文の前、例文と例文の間は1字あけるのが原則で、くっつけずに1字アケを励行していただく。
- ⑥古典語の取り扱いについて
- ①古典語および詞・曲などの語彙はまとめて一か所にとり出しておく。ただし、その中で現代語として注釈も用例もつけられるものは現代語とみなして処理して、それ以外のは全部一律にとり出して所定のボックスにまとめておく。
- ②上記①に関しては後日、中国で最近にでた古典の注釈本など確実な資料と対照して、必要と思われるものを選び出して採録する。
- ⑦〔許・許〕xǔ hǔ などのように整理の都合上hǔの発音を先に整理するような場合の処置について。この場合、主要音はxǔで、そこにhǔの説明も施されるわけであるが、アルファベット順に言って、どうしてもhǔの方を先に整理することになる。それでhǔのところは単に〔許〕hǔ ⇒ xǔ B) としておいてよい。そしてxǔのあるxu〔許・許〕のカードのところへ行き、そのうちのhǔの部分処理しておく。すなわちxǔに関する解説は、そのまま手をつけずにおき、自分が関係するhǔについては処理を完全に済ませておく。
- 以上の〔許〕の場合はアルファベット順から言って主要音があとになるために起こってくる問題である。これと反対に主要音が先にあるものももちろん発音の全部にわたって処理する。たとえば〔給・給〕gěi jǐ yǎ や〔解〕jiě jiè xiè
- ⑧同一のカードが幾枚もある場合、なるべく“国語辞典”・“同音字典”の切りばりしてあるカードを残すようにする。
- ⑨張先生の書き込みのあるカードはなるべくそのまま見えるように残しておく。
- ⑩✓印の処理ずみの ⇒ を動かすとき、書き換えるときなど、たとえば ⇒ [……①] とあるような場合の①を②に変えるようなときは、気をつけて必ず相手カードを突き止めて直しておく。
- ⑪〔油汪汪地〕のように同じ字がかさなる場合、2字目を〔々〕で省略してはならない。必ず実字で書き〔汪汪〕とする。〔干干净净〕〔慢慢地〕〔規規矩矩〕など。
- ⑫原文に？！などの符号がついていたら、それをそのまま引用すること。随意に改めてはならない（なお、疑問符・感嘆符は日本語の訳文中には原則として用いない）
- ⑬日本の略字、中国の簡体字は編集整理・植字などの面倒を考慮に入れ、とくに意識してはつきり書きわける。たとえば〔对〕对〔团〕团〔边〕边
- ⑭①方言の取り扱いはいへんむずかしいので、ひとつひとつ張先生に尋ね、はっきりしたものだけを取り入れる。
- ⑮わかちがきとつづきがきは定められたとおりに厳守する。
- ⑯付録は豊富に付けるが、その具体的な内容については、今後検討する。
- (II) 整理の分担区分
- ⑰印刷所にまかせ、当処では手を抜いてもよいもの
- ⑱①カード記載の上で発音の次にすぐ解説が来ること。

- ②カード内で①②③と分けるごとに改行してあるものは、一字あけて続けること。
- ③注釈のあと改行して例文をのせている場合も、やはり一字あけて続けること。
- ④見出字・見出語はそれぞれ所定の活字、用例・解説やA) bin (I) などそれぞれ所定の活字を使い、カードにはいちいち指示しない。
- ⑤中国文の例文のあと、日本語のかっこでくくった文章の最後などに . 点を打たない。(疑問符?感嘆符!は入れる)
- ⑥各先生方が整理上、手を抜いてよいもの
- ①例文のあとの点、かっこ内の日本語のあとの点をとりのぞく仕事、また新しくうっかりしてつけてしまったもの。
- ②かなづかいのあやまり、たまにむずかしい字を使う、また文語的な言い方を用いたりすること。
- ③日本の略字と中国の簡体字との混同および偏旁簡化字の訂正。
- ④例文の前、例文と例文の間の一字あけ、①②の間、④⑤の間の一字あけ。
- ⑤:()の使用上の区別。ときに:であったり、また()であったりしてもかまわない。
- ⑥見出語の配列順序(だいたい順序通りであればよい)
- ⑦A) xi (I) [系] などの場合におけるA) (I) などの操作。
- ⑧ [玻] bō → [玻璃] [玻] bō [~璃] ガラス。などの取り扱い。
- ⑨インデックスに類するカードの作成、字音がいくつもある場合に、見出し語のはじめに挿入されるカード、xíng háng のカードなど、いわゆる雑カードの作成。
- ⑩注釈に用いてある文法用語の吟味。
- ⑪注音のしかたの吟味。。(軽声符号)の使いわけ。声調符号を用いない場合の吟味
つづりの下に____を用いる場合、用いない場合。
er 化した音のつづり。
- ⑫著しくきたなく(見にくく)なったカードの書きかえ。
- ⑬→ ← にチェックがない場合、相手カードをつきとめること。
- ⑭同一語が2か所以上に出る場合の注音・注釈の統一。
- ⑮出典の書き換え(略号を用いる)
- ⑯略号のつけ加え、同じく削除・訂正。[圖]を[国]になおすなど。
- ⑰事典的に内容の長すぎるカード、植物などについての長すぎるカードの短縮。
- ⑱同前。同上。同下。の用いかた。
- ⑲[北満洲] など不適当と思われるカードの除去、およびこの種の不適当な注釈の是正。
- ⑳同一見出語に対して注音を幾とおりもする場合の正しいあらわしかた。
- 幾つもの字音や異体字がある場合、見出語が一つしかないようなもの(場合により2, 3語ある場合でも)を字解の中に移すこと。
- 外国語のつづりを入れる場合、その前後の符号の正しい使い方。
- ㉑各先生方が担当される整理工作は、以上の諸点をのぞいたあと全部を執筆基準に従って完璧を期してやっていただく。
- ・不要カード(見出語として採用を必要と認めない語や実際には存在しない語のカード)を取

り除けること。

- ・誤り（用字法・拼音・軽重音・注釈・用例などいっさいに関する誤りはもちろん、＝⇒の誤った使用も含める）はすべて正しておくこと。
- ・とくに取り上げて気をつけていただくこと。
- ・＝⇒の使用を慎重にすること。またこれをまちがいに実行することは、執筆基準の中でもとくにほねのおれる項目であるが、しかもなお励行していただく。
- ・未整理のカードを残さないこと。
- ・同一見出語のカードを重複させ残さないこと。
- ・幾つも字音・異体字がある場合、見出語を字音順・異体字順のグループ別にしておくこと。
- ・任意な符号の応用や符号を新しく創作することは避けていただくこと。
- ・注釈の区分(①②③④)の数はだいたい同音字典を基準とすること。

(III) 現在の編集方針および進捗状況の大略 (1960.10.7)

メンバー できれば増員したいが不可能であれば、現在のメンバーでゆく。

分担 主として内容的な仕事を S・M・E・K・U・C 6人が担当、主として整理的な仕事を Z・I が担当、前者と後者の分担範囲を別項の通り明確にし内容の正確を期する。

現在行っている整理の重要性

現在行っている整理は最終的整理のつもりで、できるだけ完璧を期すること。

整理の完成目標

従来、当処が公式に表明してきた、昭和36年度末までに完了という目標は、すでに絶対完遂不可能と思われる状態になっている。しかも外部では整理完了すなわち辞典完成と解している傾向がある。

このことは、35年度末までに整理完了のメドをつけて、学長に了解を求める。

(IV) “語詞採録のための文献目録”

出典名の略号は次のように行う。

- ①現代の作品の出典名をあげる場合は、作者名の頭の一字と作品名の頭の一字を結びつけ、それに章数・回数をつけるのを原則とする。

例	毛泽东	矛盾论	(毛・矛3)	3は第三節のこと。
	曲波	林海雪原	(曲・林5)	
	茅盾	林家铺子	(茅・林4)	
	周立波	暴风骤雨	(周・暴6)	
	罗丹	风雨的黎明	(罗・风3の2)	第三章第二節のこと。

- ②なお、上・下、I部II部となっているようなものの取り扱い、

(周・上I3) 周而复上海的早晨 I部の第3章

以上が原則であるが、例外を認める。

鲁迅 阿Q正传 (鲁・Q1)

- ③旧小説などは大体一字の略字を用いる。

红楼梦 (红35)

水浒传	(水 100)	
西游记	(西 17)	
金瓶梅	(金 27)	
儒林外史	(儒 40)	
三国志演义	(三 10)	
西厢记	(厢 5)	西は西游记なので厢とする。
元曲选	(元・汉宫秋 3)	元曲のうち汉宫秋 3 折のこと。

◎史記・漢書・詩經・楚辭など古い文献やなじみのうすい書物などは、原則として書名全体を書き略号は使用しない。

(史记・伯夷叔齐传)
 (诗经・大雅文王)
 (三国志・蜀志・诸葛亮传)
 (左传・僖公 29 年)
 (杜甫・春望诗)
 (捉季布传文)
 (三朝北盟会编)

略号のつけ方の原則

①現代の作品は、作者名と作品名の頭の一字をとって付け、間に中黒点を打つ。

(老・駱 2) (赵・小 1)

②旧小説・戯曲などの白話文献は一字の略号を用いる。

(红 9) (金 13)

現代著作小説の部

*印は周揚報告の中の優秀作品

作者名	書名	略号	作者名	書名	略号
老舍	四世同堂	(老・四・惶)	柳青	铜墙铁壁	
老舍	上任	(老・上)		*创业史	S
	离婚		周而复	上海的早晨	C
	骆驼祥子 (劇作は後出)		乌兰巴干	*草原烽火	
鲁迅	呐喊 (全部)	(魯・狂)	沈从文	边城	
	彷徨 (全部)	(魯・祝)		自传	
毛泽东	文艺讲话		艾芜	荒地	
	实践论			*百炼成钢	
	矛盾论		曲波	*林海雪原	C
	新民主主义论		孔厥	新儿女英雄传	
郭沫若	自传		马烽	吕梁英雄传	
茅盾	子夜			*我的第一个上级	
	霜叶红似二月花 C		高玉宝	高玉宝	(高・玉)
	林家铺子		李季	王贵与李香莲	

赵树理	小二黑结婚	I		艾青	吴满有	
	李有才板话	I	(赵·才)	徐光耀	平原烈火	
	李家庄的变迁	I	(赵·庄)	杜鹏程	保卫延安	
	*灵仙洞				*在和平的日子里	
	*三里湾	C		杨沫	*青春之歌	
巴金	家			梁斌	*红旗谱	
	灭亡			刘沧浪	红旗歌	
丁玲	太阳照在桑干河上	C		草明	火车头	
丁玲	我在霞村的时候			欧阳山	*三家巷	
周立波	暴风骤雨			袁水拍	*马凡陀的山歌	
作者名	書名		略号	作者名	書名	略号
	*山乡巨变			冯德英	*苦菜花	
黄谷柳	虾球传			德龄	御香缥缈录	
丁西林	一只马蜂				御苑兰馨记	
梅兰芳	舞台生活四十年	S			黎明的河边	
废名	莫须有先生				铁道游击队	
叶圣陶	倪焕之				战斗的幸福	
落花生	缀网捞蛛				乘风破浪	
欧阳予倩	自我演戏以来				风雪之夜	
李广田	引力			白刃	战争到明天第一步	白·战
王统照	山雨					
李英儒	野火春风斗古城	C				
张恨水	梁山伯与祝英台					
吴组缃	天下太平					
叶紫	山村一夜					
柔石	希望					
魏金枝	留下镇上的黄昏					
罗丹	风雨的黎明	C				
宋之的	雾重庆	C				
谢冰心	寄小读者	C	谢·寄			
马加	开不败的花					
骆宾基	北望园之春					
苏军	第三代					
许广平·鲁迅	两地书					
许广平	遭难前后					
李健吾	这不过是春天					
崔秋白	海上述林					

朱自清	背影				
	毁灭				
郁达夫	沉沦				
	自传				
胡适	四十自述				

劇作の部

*印は周揚報告の中の優秀作品

作者名	書名	略号	作者名	書名	略号
老舍	老舍戏剧集 S	(老・龙)		*东进序曲	
		(老・女)	胡可	*槐树庄(剧本 59.8)	
		(老・方)		*追鱼	
		(老・茶)		*红色的种子	
	金家福 C			*鸡毛飞上天	
	春华秋实 S			*冬去春来	
	面子问题			*洪湖赤卫队	
郭沫若	屈原			*文成公主	
	*蔡文姬			*嘎达梅林	
田汉	名优之死			*同志!你走错了路	
	*关汉卿			*战斗里成长	
曹禺	雷雨			*明朗的天	
洪深	五奎桥			*十五贯	
丁毅	白毛女			*生死牌	
夏衍	芳草天涯			*穆桂英挂帅	
设承滨 杜士俊	*降龙伏虎(剧本 59.3)			*杨门女将	
上海人民艺 术院	*共产主义凯歌			*搜书院	
陈其通	*万水千山			*美奴转	
金山	*红色风暴			*父子恨	
杜烽	*英雄万岁			*墙头马上	

映画の部

歴史の部

作者名	書名	略号	作者名	書名	略号
	*上甘岭			*星火燎原	
	*林则徐			*北方的红星	

3-1 d

	*风暴			*红色安源	
	*聂耳			*绿树成荫	
	*董存瑞				
	*战火中的青春				

叙事詩・民間伝説の部

雑

作者名	書名	略号	作者名	書名	略号
	*杨高传			北方土语辞典	
	*赶车传			成语小词典	
	*动荡的年代			中国西北方言资料	
	*阿诗玛			常用词语例解	
	*召树屯			人民画报	
	*刘三姐			人民日报	
	*秦娘美				

旧小説・戯曲の部

作者名	書名	略号	作者名	書名	略号
	董西厢	(董厢)		镜花缘	(镜)
	西厢记	(王厢)		初刻拍案惊奇	(初拍)
	西游记	(西)		二刻拍案惊奇	(二拍)
	敦煌变文集	(敦)		明人杂剧	(明)
	朴通事谚解	(朴)		明清传奇	(明)
	元曲选	(元)		儿女英雄传	(儿)
	孤本元明杂剧	(孤元)		官场现形记	(官)
	三国志演义	(三)		老残游记	(老)
	水浒全传	(水)		孽海花	(海)
	金瓶梅	(金)		二十年目睹之怪现状	(怪)
	儒林外史	(儒)			
	红楼梦	(红)			

・元曲のなかに、元曲選訳や六十種典、閩漢劇戯曲選など雑多な書をふくめてしまい、元曲の全体を(元)であらわし、たとえば(元・汉宮秋3)とし、元曲のうち漢宮秋の第3折であることをあらわすようにする。明人雑劇の場合も同じで、全体を(明)であらわし、後に作品名をつける。(明・易水寒1)明人雑劇のうち葉憲祖の易水寒の第一折の意味。

・なお国語辞典などに(红楼梦)(元曲选)などとあって回数を示していない用例があるが、このうち捨

てるにしのびない例は、(紅)(元)として採用しておく。ただしこれから採集するものには必ず章数・回数を表示する。

古代の文献の部

史记	(史记・高祖本纪)(史记・货殖传)など
汉书	(汉书・艺文志)(汉书・儒林传序)など
后汉书	(后汉书・五行志)(后汉书・光武帝纪)など
诗经	(诗经・大雅文王)(诗经・周南・卷耳)など
三国志	(三国志・蜀志・诸葛亮传)(三国志・魏志・曹植传)など
左传	(左传・僖公29年)(左传・成公10年)など
楚辞	(楚辞・远游)(楚辞・天问)など
杜甫	(杜甫・春望诗)(杜甫・兵车行)など
乐府	(乐府・相和歌)(乐府・汉饶歌)など

・古代の文献には出典略号を用いない。歴代の史書や経書・詩文集などは用例として採用する場合が少ないので、いちいち略号をとりきめない。

執筆基準について

1955年(昭30)4月華日辞典編纂処(現中日大辞典編纂所)が発足し、5月辞典刊行会が設立されて、評議員、編纂委員、協力委員が任命され、直ちに編纂委員会が組織された。鈴木擇郎教授が委員長となり、編集の基本方針や執筆規準等がきめられていった。

夏には内山正夫教授から執筆規準の骨子がまず起草された。またこの頃、新中国では規範的中国語を形成する過程にあり、文字、発音、符号、部首や語彙、語法など様々な問題が審議、決定され次々と公表された。これらは直ちに執筆基準に反映されるべきものであった。従って基準も次々と改訂されることとなった。

現在、1961年10月第11次改正のこの執筆基準が唯一まとまった形で残されているので参考のため載せたが、この後もしばしば加筆や削除が行われたため、最終的なものではない。